バカとテストと天才少年

境

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと天才少年

【Ｎコード】

Ｎ１５０５Ｘ

【作者名】

境

【あらすじ】

主人公の風島恭介（かざしまきょうすけ）は成績優秀でＡクラス確実と言われていたが、振り分け試験をさぼったためＦクラスになってしまう！学年最下位のクラスで彼と彼の友人である明久たちによる波乱の日々が始まる

プロローグ（前書き）

これが初めての投稿になります。文章力には欠けるかもしれませんがよろしくお願いします！誤字脱字などありましたら言ってください

プロローグ

俺こと風島恭介（かざしまきょうすけ）は文月学園に通う高校2年生だ。そして今日は始業式の日だったりする

★

校門に差し掛かったところで
「風島、遅刻だぞ」
とドスのきいた声に呼び止められた。声のしたほうを向くと
「げっ、鉄人」
「鉄人じゃない西村先生と呼べ」
そこにいたのは文月学園の生活指導の鬼教師、鉄人こと西村先生がいた
「ああ、すみません鉄じ・・・じゃなくて西村先生。おはようございます」
「今また鉄人と言わなかったか？」
「気のせいですよ」
「ふぅ、まあいい。それにしても普通に『おはようございます』じゃないだろうが」
何かあっただろうかと考えたが分からなかったので
「えっと・・・今日も暑苦しいぐらいの筋肉ですね」
と軽い冗談のつもりで言ったのだが
「そうか、お前はそんなに罰を受けたいのか」
と恐ろしいほど低くドスのきいた声で言ったので
「すいませんでした、勘弁してください」
速攻で謝った。え？何？プライド？知るかそんなもの、命のほうが大事だ
「・・・おまえには遅刻の謝罪よりも、教師への罵倒のほうが重要

なのか？」
「あ、そっちですか。すいません。それで先生はここで何をしてるんですか？」
気になったので聞いてみた。すると
「これだ」
と言って『風島恭介』と大きく俺の名前が書かれた封筒を差し出してきた
「ああ・・・クラス分けですか。それなら俺は渡されなくてもわかってるんですからわざわざ待ってることなかったんじゃないですか？」
「そういう訳にもいかんだろう・・・まったくお前というやつはよりにもよって振り分け試験をさぼりおって」
俺の通う文月学園には学年末に振り分け試験というものがある。その試験の成績によって上からA～Fのクラスに決められる。それをさぼったので必然的におれはFクラス、つまり最下位クラスということになる
「お前ならAクラスの主席も狙えただろうに・・・」
と鉄人がため息をつきながら言う。まあ実際まともに試験を受けていたらまず間違いなくAクラス主席になっていただろ。教師にならともかく一般生徒に成績で負けるとは思はない。でも俺はクラス分けは別にどうでもよかったので
「まあ、Fクラスの方が楽そうなんで」
と適当に答えて教室に向かった

キャラ紹介

名前：風島恭介
年齢：１６歳
身長：１７４？
体重：６０？
容姿：中世的な顔立ちで茶髪
性格：面倒なことが嫌いで、サボり癖がある
成績：総合科目だと毎回７０００点超え、調子がいい時は８０００点を超えることがある

その他：ドイツ育ちで美波とはそのころから家が隣で仲が良い。何の縁があってか現在も家が隣。父と母の３人で暮らしている。明久、雄二、秀吉、ムッツリーニとは１年の頃からの付き合い、恭介は成績は優秀だが生活態度が悪くよく問題を起こすため明久、雄二とともによく鉄人に追いかけられている

一限目　Fクラス

「なんだこれ」
1年の時は教室が2階だったため3階にはほとんど来たことがなかったのだが、まず目に入ったのは普通の教室の5倍はあるであろう広さを持つ教室だった。クラスプレートを見てみると

『2年Aクラス』

教室の中をのぞいてみると巨大なプラズマディスプレイに1人につき1台のノートパソコン、個人エアコンに冷蔵庫、リクライニングシートまであった
「流石にAクラスの設備はとんでもないな」
（まあ俺には関係ないか）
そう思い俺はFクラスへと足を進めた

★

「酷過ぎるだろ、これ・・・」
Fクラスについてまず一声はそれだった。蜘蛛の巣の張った天井、机や椅子はなく代わりにボロい卓袱台に座布団があるだけ、更には隙間風が入り放題というとてもじゃないがまともに勉強できるような環境ではなかった
（まあ、どうせ授業なんかまともに聞かないんだしどうでもいいか）
そう思い教室に入った
「すいません、遅れました」
「早く座れ、このうじ虫野郎！」
教壇から教師とは思えない罵声が聞こえてきた。そっちを見てみるとそこには見知った顔があった、当然教師ではない

「・・・何やってるんだよ、雄二」
俺の悪友である『坂本雄二』がいた
「先生が遅れてるみたいだから、代わりに教壇に上がってみた」
「なんでお前が？」
「俺がこのクラスの最高成績者だからな」
「は？じゃあお前がクラス代表なのか？」
「そうだ」
うわぁ・・・流石Ｆクラス、レベルが低い
「お前今すげぇ失礼なこと考えただろ」
睨みながら言ってくる、こういうことだけは鋭い
「別に？気のせいじゃないか」
面倒なので適当にごまかす
「ふん、まあいい。それにしてもこれでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」
床に座っているクラスメートたちを見下ろして言う。俺はどこかあいている場所がないか見まわした
「おーい、恭介」
聞きなれた声が聞こえてきた
「明久か」
『吉井明久』こいつも俺の悪友の一人だ。俺はとりあえず明久の後ろの席（？）に座った
「聞いたよ、振り分け試験サボったんだって？」
「まあな」
「もったいないなぁ、恭介ならＡクラスだって楽勝だったでしょ？」
「別にいいだろ。それよりもやっぱりお前はＦクラスだったんだな」
「むっ、失礼なこれでも結構解けたんだよ？」
「ほぉ、じゃあどれくらい出来たんだ？」
「十問に一問は・・・「小学生からやり直せ」ひどいっ！」
そんなことを話していると教室の入り口から声が聞こえてきた
「席に着いてください。ＨＲを始めますので」

どうやら担任が来たようだ
「えー、おはようございます。２年Ｆクラス担任の・・・福原慎です。よろしくお願いします。」
福原先生は黒板に名前を書こうとして、やめた。どうやらチョークがなかったようだ
（チョークなしでどうやって授業やるんだよ）
そう思ったが呑み込んだ。いちいち突っ込んでいたらきりがない
「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があったら申し出てください」
それ以前にこの教室に完備されているものなんてあるんだろうか？
そう疑問に思わざるおえなかった
「せんせー、俺の座布団にほとんど綿が入っていません」
「我慢してください」
「先生、俺の卓袱台の足が折れています」
「木工ボンドが支給されているので、後で自分で直してください」
「せんせ、窓が割れていて風が寒いんですけど」
「ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」
・・・ほとんど我慢するか自分でどうにかしてくれとしか言ってないよな
「では、自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願いします」
先生に言われ廊下側の生徒が一人立ちあがり名前を告げる
「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」
ん？なんだ秀吉じゃないか
木下秀吉。俺の１年の頃からの友人の一人、ぱっと見女子にしか見えないが生物学的には男らしい
「・・・と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」
軽やかにほほ笑みを作って自己紹介を終える秀吉。・・・やっぱり女子にしか見えないな
「・・・・土屋康太」

なんだムッツリーニもFクラスなのか。
ムッツリーニこと土屋康太。彼も1年の頃からの俺の友人だ。ていうか明久に雄二、秀吉にムッツリーニって去年の面子揃い踏みじゃないか・・・類は友を呼ぶとはよく言ったものだ
それにしても、見渡す限り男だな。最下位クラスだけあってやはり女子は少ないようだ
「・・・です。海外育ちで、日本語は会話は出来るけど読み書きは苦手です。」
と、考えているうちにまた次の人。声からして女子のようだ
「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は・・・」
ん？ていうかこの声は
「・・・趣味は風島恭介を殴ることです☆」
・・・こんなピンポイントな趣味の持ち主を俺は一人しか知らない。
声のしたほうを見ると
「はろはろー」
笑顔でこちらに手を振るのは、
「・・・やっぱり美波か」
「恭介、今年もよろしくね」
島田美波。俺の幼馴染であり天敵でもある
美波の自己紹介が終わり、その後は淡々と名前を告げるだけの作業が進む。そして次は明久の番になった
「えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね♪」

『ダァァーーリィーーン！！』

おぇ、こんなに不快な大合唱初めて聞いたぞ
「・・・失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願いします」
明久も相当不快だったようで、作り笑いでごまかしながら席に着い

た。しかし本当にやるとは流石Ｆクラスだ
（さて、次は俺か）
そう思い立ちあがった瞬間、不意にガラッと教室のドアが開き、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた
「あの、遅れて、すいま、せん・・・」
『えっ？』
誰からという訳でもなく、教室全体から驚いたような声が上がる
「ちょうどよかったです。自己紹介をしているところでしたので姫路さんもお願いします」
「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします・・・」
「はいっ！質問です！」
既に自己紹介を終えた男子生徒の１人が手を挙げる
「あ、は、はい。なんですか？」
「なんでここにいるんですか？」
聞き様によっては失礼な質問、しかしそれはこのクラスの全員が疑問に思っていることだった。
彼女はこの学園に入学して最初の試験で学年３位を記録している。その後も常に上位ひと桁以内に名前を残している。そんな彼女が最下位クラスであるＦクラスにいるはずがない。学年中のだれもが彼女はＡクラスにいると思っているだろう
「そ、その・・・振り分け試験の途中に、高熱を出してしまいまして・・・」
試験中の途中退席は０点扱いとなる。彼女は昨年度の振り分け試験を最後まで受けることができず、結果としてＦクラスに振り分けられることになったのだ
そんな姫路の言い分を聞き、クラスの中でもちらほら言い訳の声が上がる
『そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでＦクラスに』
『ああ。化学だろ？あれは難しかったな』

『俺は弟が事故にあったと聞いて実力を出し切れなくて』
『黙れ一人っ子』
『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』
『今年一番の大嘘をありがとう』
・・・流石Fクラス、言い訳もFクラス並みだった。そんな中一人の男子生徒が俺のほうを見て言った
「あれ？そういえばあいつって風島じゃないか」
「なに！風島だと！あいつって確か学年一位のはずじゃ」
「あいつも途中退席したのか？」
再び騒がしくなった。それを雄二が
「落ち着けみんな、あいつは振り分け試験をサボったんだ」
と言い黙らせた。ようやく場が落ち着いてきたので俺は自己紹介を始めた
「風島恭介だ。そこにいる島田美波とはドイツにいたときからの幼馴染で、あと趣味は吉井明久と坂本雄二が苦しんでいる姿を眺めてることだ」

『『『ドSだっっ！！』』』

クラス全体から一気に引かれたが俺はそれを無視して席に着いた。
そんな中、姫路は逃げるように明久と雄二の隣の卓袱台に着いていた。席に着くや否や、安堵の息を吐いて卓袱台に突っ伏す姫路、そこへ
「あのさ、姫路さ「姫路」」
明久の声のかぶせるように雄二が声をかける
「は、はいっ。何ですか？えーっと・・・」
「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」
「あ、姫路です。よろしくお願いします」
雄二が姫路に挨拶していたので俺もしておこうと思い姫路に声をかける

「あ、あのさ姫「姫路」」
明久の声にかぶった気がしたが無視した
「あ、はい。えっと、風島君ですよね」
「ああ、風島恭介だ。よろしくな」
「はい、よろしくお願いします」
深々と頭を下げて挨拶を返す姫路。そこへ
「ところで、姫路の体調はいまだに悪いのか？」
「あ、それは僕も気になる」
雄二が姫路の体調について聞き、そこへ明久が口を挟んで来た。明久は振り分け試験の時姫路の隣の席に座っていたらしいから、余計に体調が気になるのだろう
「よ、吉井君！？」
明久の顔を見て驚く姫路。俺はその様子からあることを察した
「「姫路、明久がブサイクですまん（悪いな）」」
やはり雄二も同じことを考えていたようだ。はからずとも声が重なった
「そ、そんな！目もぱっちりあいてるし、顔のラインも細くてきれいだし、全然不細工じゃないですよ！その、むしろ・・・」
「そう言われると、確かに見てくれは悪くないかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいた気もするし」
雄二がそんなことを言い始めた。・・・なるほどそういうことか。俺は雄二の考えていることに築き合わせることにした
「ああ、そういえば俺の知人にもそういう奴がいたなぁ」
「え？それは誰・・・」
「そ、それって誰ですか！」
明久の声が姫路によって遮られる。・・・ていうかこの反応は間違いないな。姫路もわかりやすい奴だ
「「確か、久保・・・利光だったかな」」

久保利光　性別　男

「・・・・・・」
「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな」
「心配するな、半分は冗談だ」
「え？残りの半分は？」
「ところで姫路、体調はもう大丈夫なのか？」
「あ、はい。もう大丈夫です」
「ねえ恭介！残りの半分は！」
取り合わない俺に明久が大声を出した
「はいはい。そこの人たち、静かにしてくださいね」
そのせいで先生に、パンパン、と教卓をたたいて注意されてしまった
「あ、すいませ・・・」

バキィッ　バラバラバラ・・・・・・・

・・・突如、教卓は音を立てながら崩れ落ち、ゴミ屑と化した
(どんだけボロいんだよ)
「え～・・・替えを用意してきます。少し待っていてください」
先生は気まずそうに言い、足早に教室から出て行った
「あ、あはは」
姫路が苦笑いをしていた
「・・・雄二、ちょっといいかな」
それを見た明久はクラス代表である雄二に声をかけた
「ん？なんだ？」
「ここじゃ話しにくいから、廊下で」
「別にかまわんが」
そう言って明久と雄二が教室を出ていく、俺は面倒だったからついていかなった・・・まあ、大体何の話か予想はつくが
「そういえば姫路」
「あ、はい。何ですか？」

「お前って明久のことが好きなのか」
「えっ！そ、それは、その・・・」
姫路は顔を真っ赤にしてうつむいた・・・本当に分かりやすいな
「まあ言いたくないならいいけどな。まっ何かあったら言えよ少しくらいなら力になってやるからよ」
「あっ、あの、ありがとうございます」
姫路は笑顔でそう言った

★

少しして明久と雄二が戻ってくる
「それでは自己紹介の続きをお願いします」
教卓を取り替えてＨＲが再開される。ちなみに取り替えたといっても教卓はぼろいことに変わりはなかった
「えーと、須川亮です。趣味は・・・」
特に何も起こらず、また淡々とした自己紹介の時間が流れる
「坂本君、君が自己紹介最後の一人ですよ」
「了解」
雄二はゆっくりと教壇に立った。そこにはいつものふざけたような雰囲気はなく、代表にふさわしい貫禄を身にまとっていた
「坂本君はＦクラスの代表でしたよね？」
先生に問われ雄二は静かに頷く
「Ｆクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも自由に読んでもらって構わない」
クラスメートから対して注目されるわけでもない。代表といってもＦクラスというバカの集まりの中で比較的成績が良かったというだけの生徒
「さて、みんなに一つ聞きたい」
そんな生徒が、ゆっくりと、全員の目を見るように言う
間の取り方がうまいからか全員の視線はすぐに雄二に向けられるよ

うになった
「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが・・・」
一呼吸おいて、静かに言う
「・・・不満はないか？」

『大ありじゃぁっ！！』

Fクラス生徒の魂の叫びだった
『いくら学費が安いからといって、この設備はあんまりだ！改善を要求する！』
『そもそもAクラスも同じ学費だろ？いくらなんでも差がありすぎる！』
次々と上がる不満の声
「みんなの不満はもっともだ。そこで、これは代表としての提案だが・・・FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」
Fクラス代表、雄二によって戦争の引き金が引かれる。そんな中俺はこう思っていた
（ふう・・・これからいろいろと面倒なことが起こりそうだ）、と

二限目　勝算

「FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」
Aクラスへの宣戦布告
それを聞いてクラスのあちこちから不満が上がる
『勝てるわけがない』
『これ以上設備を下げられるなんていやだ』
『姫路さんがいたら何もいらない』
それは当然の意見だった。Aクラスは学年最高クラス、それに対してFクラスは学年最低クラス戦力差は誰が見ても明らかだ
文月学園には『試験召喚システム』というものがある。これはテストの点数に応じた力を持つ『召喚獣』を呼び出し戦わせることができるシステムで、教師の対会いのもとで行使が可能となる。学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強へのモチベーション上げるために提案された先進的な試み。その中心となるのが、召喚獣を用いたクラス単位の戦争、試験召喚戦争と呼ばれる戦いだ。しかし先ほども言ったように、召喚獣の強さはテストの点数に比例する。つまりテストの点数がそのままクラスの戦力となるのだ。繰り返し言うがFクラスは学年最低クラスだ。そんなFクラスが学年トップのAクラスに勝つなんてだれも思わないだろう
「そんなことはない、必ず勝てる。いや、俺が必ず勝たせて見せる」
そんな圧倒的な戦力差を知りながら雄二が宣言する
『何を馬鹿なことを』
『出来るわけがないだろう』
『何の根拠があってそんなことを』
否定的な意見が上がる
確かにどう考えても勝てると勝負とは思えないだろう。おそらく言いだしっぺであるであろう明久も怪訝な表情をしている
「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのでき

る要素がそろっている」
こんな雄二の言葉を受けてクラスのみんなが更にざわめく
「それを今から説明してやる」
そう言って雄二は不敵な笑みを浮かべながら壇上からみんなを見下ろす
「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないでこっちに来い」
「・・・・・・！！（ブンブン）」
「は、はわっ」
必死になって顔と手を左右に振って否定のポーズをとるムッツリーニ
姫路がスカートのすそを抑えて遠ざかると、あいつは顔に着いた畳の跡を抑えながら壇上に歩いて行った
・・・というかあれだけはっきりと残っている跡をいまさら隠す意味があるのだろうか？流石はムッツリーニだ
「土屋康太。こいつがあの有名な、寡黙（ムッツリーニ）なる性識者だ」
『ムッツリーニだと・・・？』
『馬鹿な、奴がそうだというのか・・・？』
『だが見ろ、あそこまで明らかなのぞきの証拠をいまだに隠そうとしているぞ・・・』
『ああ。ムッツリの名に恥じない姿だ』
土屋康太という名前は有名じゃない。でもムッツリーニという名前は別だ。その名は男子には畏怖と畏敬を女子には軽蔑を持ってあげられる。ちなみにムッツリーニというのは当然『ムッツリスケベ』のことだ
「？？？」
だが姫路にはそれがわからないらしく、頭に疑問視を浮かべていた。まあ確かにあいつには縁のない言葉だろう
「姫路や風島のことは説明するまでもないだろう。みんなだってその実力は知っているはずだ」
「おいちょっとまて」「ん？何だ恭介」

なんだじゃない。いつの間にか俺まで戦力に数えられていた。冗談じゃない
「俺はそんなもんに参加する気はねえぞ」
「決定事項だ。このクラスになったからにはお前にも協力してもらう」
有無を言わせぬ物言い。こうなったらあいつはきかない。俺は渋々席に着いた
（まあ、適当に抜けてサボればいいか）
『そうだ俺たちにはあいつらがいるんだった』
『風島は学年トップの実力だし、姫路さんもAクラスに引けを取らない』
『ああ、姫路さんがいれば何もいらないな』
徐々にクラスの士気が上がってきていた。・・・ていうかさっきから姫路にラブコールをしている奴がいるんだが
「木下秀吉だっている」
『おお・・・！』
『あいつ確か、木下優子の・・・』
「当然俺も全力を尽くす」
『確かになんだかやってくれそうな奴だ』
『坂本って、小学生のころは神童とか呼ばれてなかったか？』
『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じで体調不良だったのか？』
『実力はAクラスレベルが三人いるってことだよな』
気がつけばクラスの士気は確実に上がっていた
「それに、吉井明久だっている」

・・・シン・・・

そして一気に下がった
「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全く必要な

いよね！」
「確かに邪魔でしかないな」「そこは否定してよ、恭介！」
『誰だよ、吉井明久って』
『聞いたことがないぞ』
「そうか、知らないようなら教えてやる。こいつの肩書は『観察処分者だ』」
『・・・それって馬鹿の代名詞じゃなかったか？』
誰かがそう口にする
「ち、違うよ。ちょっぴりお茶目な十六歳につけられる愛称で」「明久。流石にそれは苦しいぞ？」「ぐっ」
「そうだ。馬鹿の代名詞だ」
「肯定するな馬鹿雄二！」
『おいおい観察処分者ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ？』
『だよな。それならおいそれと召喚できない奴がいるってことになるよな』
そう。観察処分者の召喚獣はほかの召喚獣と違って物理干渉ができるが、そのかわり召喚獣の負担のいくらかが本人にフィードバックするのだ。要するに召喚獣がダメージを受けると明久にもそのダメージの何割かが返ってくるということだ
「気にするな。どうせ、いてもいなくても変わらないような雑魚だ」
「雄二、そこは僕をフォローするセリフを言うべきところだよね？」
「お前にフォローできるような点ってあったっけ？」「恭介なんて嫌いだっ！」
「とにかくだ。俺たちの力の証明として、まずはDクラスを征服しようと思う」
明久の叫びは見事にスルーされた
「皆、この境遇は大いに不満だろう？」
『当然だ！！』
「ならば全員ペンを執れ！出陣の準備だ！」

『おおーー！』
「俺たちに必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」
『うおおーーっ！』
「お、おー・・」
クラスの雰囲気に圧されたのか姫路も小さく拳を作り上げていた
「明久にはだクラスに宣戦布告に行ってもらう。無事大役を果たせ！」
「・・・下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目にあうよね？」
「そんなの映画や小説の中だけの話だ。大事な使者に手荒な事をする訳ないだろう？」
「本当に？」
明久はまだ疑っているようだった。正直俺のほうに振られると面倒だったので俺も雄二に乗ることにし、明久の耳元で囁いた
「ここで行けば姫路にかっこいいところ見せられるぞ？」「僕に任せて」
即答だった
「じゃあ行ってくるね」
「ああ、逝ってこい」「字が違うよ！？」
明久はDクラスに走って行った
（・・・本当に扱いやすい奴だ）

★

「騙されたぁ！」
「「やはりそう来たか」」
「やはりってなんだよ！っていうか恭介もわかってたんだね！」
「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか」
「つーか少し考えればわかるだろ」

「少しは悪びれろよ！」
明久が叫んでいたが適当に流した
「吉井君、大丈夫ですか？」
そこへ姫路が心配そうに駆け寄ってくる
「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷」
「ちっ」
「恭介、今舌打ちしたよね！？」
「別に、もっとぼろぼろにやられてくればよかったのになんて思ってないぞ？」
「おもいっきり言ってるじゃないか！！」
「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ」
そう言って雄二は教室を出ていく。どうやら別の場所で行うつもりのようだ。明久も渋々それについていく
（さて、俺は適当にさぼるか）
そう考えていると
「恭介」
不意に美波に声をかけられる
「ん？なんだ美波」
「逃げようなんて考えるんじゃないわよ？」
読まれていた
「・・・何のことだ？」
「やっぱり逃げるつもりだったようね・・・一度、Ｄａｓ　Ｂｒｅｃｈｅｎ・・・ええと日本語だと」
「調教・・・だろ？ていうかせめて教育とか指導にしてくれよ」
「じゃあ、中間とってＺｉｉｃｈｔｉｇｕｎｇ・・・」
「折檻って余計ひどくなってるじゃねえか！」
「うるさいわね。一発殴られたい？」
「・・・すいませんでした」
そんな会話をしながら校内を歩いていると、先頭の雄二が屋上に通

じるドアを開けて外に出る
「明久。宣戦布告はしてきたな？」
雄二がフェンスの前にある段差に腰を下ろす
「一応今日の午後に開戦予定と告げてきたけど」
俺たちもそれぞれ腰を下ろす
「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」
「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともなものを食べろよ」
「そう思うならパンでもおごってくれると嬉しいんだけど」
「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」
姫路が驚いたような顔で明久を見る
「いや。一応食べてるよ」
「・・・あれは食べていると言えるのか？」
雄二が横やりを入れる。だが俺もそれには同感だった
「確かにあれは食べているとは言えないな」
「何が言いたいのさ」
「いや、だってよ、お前の主食って・・・水と塩だろ？」
哀れみをこめて言う
「キチンと砂糖だって食べているさ！」
「あの、吉井君。水と塩と砂糖って食べるとは言いませんよ・・・」
「舐める、が表現としては正解じゃろうな」
みんなが妙にやさしい目で明久を見る
「ま、飯代まで遊びに使うお前が悪いよな」
「し、仕送りが少ないんだよ」
「あんだけ山のようにゲーム勝っておいてよく言えるな・・・」
そう、実は明久は両親が仕事の都合で海外にいるため、一人暮らしをしている。もちろん生活費は送られているのだが、そのほとんどはゲームや漫画に消えている。なのでこいつの主食はもっぱら水と塩と砂糖なのだ。
「・・・あの、よかったら私がお弁当作ってきましょうか？」
「ゑ？」

急に姫路がそんなことを言い出した
「本当にいいの？僕水と塩と砂糖以外のものを食べるなんて久しぶりだよ」
・・・ホント、よく生きてるよな
「はい。明日のお昼でよければ」
「よかったじゃないか明久。手ずくり弁当だぞ？」
「うん！」
「確かにうらやましいな」
本当にそう思う
「何、恭介も瑞希のお弁当食べたかったの？」
不機嫌そうな顔で美波がきいてくる。なんで怒ってるんだ？
「いやそうじゃなくってさ、ほら俺の親ってあれだろ？だから手ずくりの弁当なんてほとんど食ったことないからさ」
「ああ、そういうこと・・・」
美波も納得したように頷く。そう俺の両親は壊滅的に料理が下手で、かなり小さいころから飯は俺が作っているのだ
「あの、それでしたら風島君の分も作ってきましょうか？」
「え？いいのか。別にそんな意味で行ったわけじゃなんだが」
「はい。よろしかったら皆さんの分も」
「俺たちにも？いいのか？」
「はい。嫌じゃなかったら」
本当にできた奴だと思った。俺だけじゃなく雄二たちにも作ってやるとは
「それは楽しみじゃのう」
「・・・・・・（こくこく）」
「・・・お手並み拝見ね」
「わかりました。それじゃ皆に作ってきますね」
「姫路さんって優しいね」
明久がそう言った。正直俺もそう思う。これだけの人数の分を少しも嫌な顔をせずに作ってきてくれるというのだから

「そ、そんな」
「今だから言うけど、僕、初めて会う前から君のこと好き・・・」
「明久。今振られると弁当の話はなくなるぞ」
「・・・にしたいと思ってました」
オイ
「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」
本当だよ
「明久。お前は時々俺の想像を超えた人間になる時があるな」
「だって・・・弁当が・・・」
変態になっても弁当はほしいらしい。・・・まあ、あの食生活じゃ
それも当然かもしれないが
「さて、かなり話がそれたな。試召戦争に戻ろう」
すっかり忘れていた
「そう言えば雄二。気になってたんじゃが何故Dクラスなんじゃ？
わしらの目的はAクラスじゃろう？」
「大方Aクラスを倒すための準備だろ」
「やっぱり気付いてたか恭介」
「お前が何の計画もなくAクラスに勝とうとしてるとは思えないから
らな」
「準備？どういうこと？
「まあまず一つは試召戦争に慣れさせることだろうな」
「慣れさせる？」
明久がどういうことか分からないというようにきいてくる
「お前は先生の雑用とかをさせられたりしてよく召喚獣を使うこと
に慣れてるが、他のやつらはほとんど初心者だからな。経験を積ま
せて自信をつけさせ、更に勝つことによってクラスの士気を上げる。
一石二鳥だ」
「その通り、流石だな。それにAクラスを倒すのに必要なプロセス
だしな」
「でもさ。その話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「負けるわけないさ」
明久の心配を笑い飛ばす雄二
「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる」
「俺は協力するとは言ってないがな」「余計な茶々を入れるな」
雄二がため息をつく
「いいか、お前ら。ウチのクラスは・・・最強だ」
何の根拠もない言葉。だがなぜかその気になってくる。雄二の言葉にはそんな力があった。おそらく元来リーダー気質なのだろう
「いいわね。面白そうじゃない！」
「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」
「・・・・・・（ぐっ）」
「が、頑張ります」
「そうだねやってやろう」
打倒Aクラス
そんな荒唐無稽な夢に向かい全員の心が一つになっていた
「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」
・・・俺一人を除いて

三限目　開戦

問題　以下の意味を持つことわざを答えなさい
（1）得意なことでも失敗してしまうこと
（2）悪いことが起こった上に更に悪いことが起きる喩え

姫路瑞希、風島恭介の答え
（1）弘法も筆の誤り
（2）泣きっ面に蜂

教師のコメント
正解です。他にも（1）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、（2）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね

土屋康太の答え
（1）弘法の川流れ

教師のコメント
シュールな光景ですね

吉井明久の答え
（2）泣きっ面蹴ったり

教師のコメント
君は鬼ですか

午後になり、FクラスとDクラスの始まった中、俺は校内をぶらついていた
ん？俺は参加しなくていいのかって？
それを説明するには二時間ほどさかのぼる必要がある・・・

「恭介。お前はDクラス戦は好きにしててていいぞ」
昼食時雄二がそんなことを言い出した
「いいのか？」
「ああ、Dクラス戦は姫路がいれば何とかなるからな。そのかわり回復試験は姫路と一緒にしっかり受けろよ」
文月学園には回復試験というものが存在する。これは試召戦争で消費した点数を補充するためのものだ。要するに戦死・・・つまり点数が零点にされなければ回復試験を受けて何度でもまた戦線に復帰できるのだ。そして召喚獣の戦闘力は一番最後に受けたテスト・・・つまり振り分け試験の点数で決まるのだが、サボってテストを受けていない俺や、テストを途中退席した姫路は現在点数がゼロなのでまずはこの回復試験を受ける必要があるのだ
「参加しなくていいってんなら、俺としてはそれに越したことないが・・・いいのか？」
「ああ、そのかわり次のBクラス戦はきっちり働いてもらうぞ」
「わかった」

・・・というやりとりがあり俺は回復試験を受けた後暇になりこう

して校内をぶらついているのだ
（それにしても暇だ）
いつもこういうときは教室で寝てるのだが試召戦争中のわけだから
さすがにFクラスの教室で寝ているわけにはいかない
（屋上に行くか）
そう考えていた時

ピンポンパンポーン『連絡いたします』

聞き覚えのある声で校内放送が流れだした。この声は須川か？

『船越先生、船越先生』

ん？船越？

『吉井明久君が体育館裏で待っています』

は？

『生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

船越先生　四十五歳♀独身
婚期を逃がし、最近では単位を盾に生徒に交際を迫るようになった

「・・・・・・」
（さらば明久、お前のことは忘れない・・・）
俺は友の冥福を祈りそのまま屋上に向かった

（勝手に殺すなっ！！ｂｙ明久）

★

「・・・け、・・・・すけ」
（なんだ）
「・・きて。・・きなさいよ」
（だれだよ）
「起きなさいって言ってるでしょうがぁー！」
「腕が折れるー！」
美波に関節を極められていた
「やっと起きた？」
「殺す気かっ！」
（危うく腕が千切れそうになったぞっ！）
「いくら起こしても起きないからでしょ」
「だからってもっと他に起こし方ってもんが・・・・って試召戦争は終わったのか？」
「とっくに終わったわよ」
「勝ったんだろ？」

「まあね。ていうかあんた分かってたの？」
「いや、つーかあれで勝てなきゃ明久が不憫すぎるだろ」
「ああ・・・」
美波も苦笑いしていた。明日からの明久のことを思うと少し胸が痛む
（やっぱ俺も参加したほうがよかったかな）
なんとなくそんなことを考える
「それで設備のことだけど・・・」
「交換しなかったんだろ？」「知ってたの！」
「別に何も聞いてないけどな。雄二も言ってただろ。今回の戦いは打倒Ａクラスへのプロセスの一つだって、大方設備交換の代わりに何か条件でも出したんだろ？」
「当たり・・・っていうかあんたそんなに頭いいのに何でＡクラスに行かなかったの？」
「興味ないからな」
嘘じゃない。実際俺はクラスの設備や学校の成績には何の興味もなかった
「興味無いって・・・全く相変わらずね。そうそう、坂本からの伝言。『明日はきっちり働いてもらうからさぼるなよ』ですって」
「りょーかい。んじゃ、帰るか」
「そうね」
俺と美波はそのまま家に帰った。・・・途中で体育館裏にたたずむ船越先生を見かけた気がしたが、見なかったことにした

★

翌朝、いつも通り学校に向かう
・・・ただし美波の監視付きで。どうやら俺がサボらないよう見張っておくように雄二に言われたようだ
「おっす」
教室の戸をあける

「おう恭介。逃げずに来たようだな」
「逃げられなくしていてよく言う」
美波を監視につけられたら逃げられるわけがなかった。・・・だって逃げたら確実に殺されるし
「それで、設備のことは他の奴らにもちゃんと話したのか」
「ああ、皆にも説明したさ。問題ない」
「ふーん」
本当に人を丸めこめるのがうまい奴だ
「あ、おはよう恭介」
そこに明久がやってきた
「よう、昨日は災難だったな」
「言わないで・・・」
「でもそんな普通にしてていいのか？」
「何で？」
「今日の数学のテスト、監督の先生、船越先生らしいぞ」
それを聞いた瞬間、明久は扉を開けて廊下をかけていった

★

「うあー・・・づがれだー」
机に突っ伏す明久
ちなみに船越先生には近所のお兄さんを紹介し、昨日の呼び出しもそのことだったことにしたらしい。
「うむ。疲れたのう」
「・・・・・・（こくこく）」
いつの間にか秀吉とムッツリーニが近くに来ていた
「よし、昼飯食いに行くぞ」
勢いよく立ちあがる雄二
「ん？恭介たちは食堂に行くの？だったら一緒していい」
「ああ、島田か。別にかまわないぞ」

「それじゃ、混ぜてもらうね」
「・・・・・・（こくこく）」
「ムッツリーニ。美波に色気を求めているなら無駄ってその関節はそっちには曲がらないー！」
「ふん、次言ったら殺すからね」
本気の目だった
「まあまあ、島田さんも落ち着いて・・・」
「あ、あの。皆さん・・・」
立ち上がり、学食に行こうとしたところで声をかけられた
「ん？どうした姫路」
「え、えっと。お昼なんですけど、その、昨日の約束の・・・」
姫路がもじもじしながら俺たちのほうを見る
「ひょっとして弁当か？」
「は、はい」
どうやら昨日の約束を律儀に守って弁当を持ってきてくれたようだ
「おお、そいつはありがたいな」
「そうですか？よかったぁ～」
「それではせっかくの御馳走じゃし、屋上にでも行っていただこうかの」
「そうだな」
「そうか。それなら先に行っててくれ」
「ん？どっか行くのか？」
「ああ、飲み物でも勝ってくる。昨日のお礼も兼ねてな」
「俺は昨日参加しなったけどいいのか？」
「今日の分の前払いってことにしておく」
「そうか。悪いな」
「あ、それならウチも行く。一人じゃ持ち切れないでしょ」
珍しく美波が気遣いを見せていた
「悪いな、それじゃ頼む」
「おっけー」

「キチンと俺たちの分もとっとけよ」
「わかってるよ。早くしろよ？」
「ああ、それじゃ行ってくる」
そう言って雄二と美波が教室を出ていく
「んじゃ俺らも行くか」
「そうだね」
明久が姫路の持っていたバックを受け取り屋上まで歩いていく
「天気が良くて何よりじゃ」
「そうだな」
屋上に出ると空は青空。絶好の弁当日和だ
「シートもあるんですよ」
そう言ってシートを取り出す。幸い屋上には俺達のほかに誰もおらず貸し切り状態だった
「きもちいいねー」
「・・・・・・（こくこく）」
「あの、あんまり自信はないんですけど・・・」
『おおっ！』
明久たちがそろって声を上げる。そこには唐揚げやエビフライにおにぎりやアスパラ巻きなど、定番メニューがうまそうに詰まっていた。・・・詰まっていたのだが、なぜか俺はその弁当に恐怖を覚えずにはいられなかった
（この弁当、なぜか嫌な予感がする）
そこでムッツリーニがエビフライに手を伸ばし口に運ぼうとする
「待て！むっつりー・・・」
「・・・・・・（パク）」

バタン　　ガタガタガタガタ

突如ムッツリーニが頭から豪快に倒れ、小刻みに震えだした
「・・・・・・」

「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
俺たちは顔を見合わせる
「わわっ、土屋君！？」
姫路があわてて、配ろうとしていた箸を取り落とす
「・・・・・・・（ムクリ）」
ムッツリーニが起き上がりぐっと親指を立てる。おそらく『凄く美味しかった』と伝えたいのだろう
・・・しかしムッツリーニ。それならなぜお前の足はいまだに震えているんだ。俺には今にも倒れて二度と起き上がらなくなりそうに見えて仕方ないんだが
しかし姫路には震えてる足が見えていないようで
「よかったらどんどん食べてくださいね」
と、笑顔で勧めてきた
しかし俺の脳裏にはいまだ目を虚ろにして体を震わせるムッツリーニの姿が残っていた
（あれ、どう思う）
小声で明久が話しかけてくる
（絶対にやばい）
（・・・どう考えても演技には見えん）
（だよね）
（明久、恭介。お主ら体は頑丈か？）
（正直いには自信がないよ。食事の回数が少なすぎて退化してるから）
（俺も自信がないわけじゃないがあれは絶対に無理だ）
（ならば、ここはわしに任せてもらう）
なんと秀吉が自ら名乗り出た
（そんな、危ないよ）
（正気かっ！）
（大丈夫じゃ。これでも胃は丈夫な方じゃからな。わしの鉄の胃袋

に任せておけ）
そうはいってもあれに対抗できるのかは疑問だ。そこへ
「おう待たせたな！へー、こりゃ美味そうじゃないか。どれどれ？」
雄二登場。止める間もなく卵焼きを口に放り込む

パク　　バタン・・・ガシャガシャン、ガタガタガタガタ

ジュースの缶をぶちまけて倒れた
「さ、坂本！？ちょっとどうしたの！？」
遅れてやってきた美波が雄二に駆け寄る
・・・間違いない。本物だ
ムッツリーニ同様激しく震える雄二を見る
すると雄二は、倒れたまま俺のほうをじっと見て、目で訴えてくる

『毒を盛ったな』と

『毒じゃない。姫路の実力だ』
俺も目で返事をする。いつも一緒に行動している俺たちだからこそ出来る技。こういうときは非常に役に立つ
「あ、足が・・・攣ってな・・・」
姫路を気づつけないよう嘘をつく雄二。俺はとりあえず美波を危険から遠ざけることにした
「おい美波」
「ん？何？」
「お前が手をついてるとこさっきまで虫の死骸があったぞ」
「えぇっ！早く言ってよ」
「悪い。それよりも手、洗ってきたほうがいいぞ」
「そうね。ちょっと行ってくる」
席を立つ美波。とりあえずこれであいつは安全だろう。姫路の料理については後で説明すればいい

「島田はなかなか食事にありつけずにおるのう」
「そうだな」
はっはっは、男四人で朗らかに笑う
一方、その裏側で俺たちは必死に作戦会議を行っていた
（恭介、次はお前がいけ）
（アホか。あんなもん食ったら死ぬっつうの）
（流石にわしもさっきの姿を見ては決意が鈍る・・・）
（雄二がいきなよ！姫路さんは雄二に食べてもらいたいはずだよ！）
（何言ってるんだ？姫路はお前に食べてもらいたいんだぞ？）
（そんなことないよ！乙女心がわかってないね）
（いや、分かってないのはどっちかというとお前のほうだと・・・）
（ええい、往生際が悪い）
「あっ、姫路さんあれはなんだ！」
「えっ、なんですか？」
明久がさしたあさっての方向を姫路が見る
（いまだっ！）
（おらぁ！）
（もごぁぁっ！）
そのすきに俺が雄二を羽交い絞めにし、明久が雄二の口に弁当を突っ込む
「ふぅ、これでよし」
「無事処理完了したな」
「・・・お主ら、存外鬼畜じゃな」
秀吉が何か言っているが気にしない
雄二がさらに激しく震えているが気にしない
「ごめん見間違いだったよ」
「あ、そうだったんですか」
こいつもよくこんな古典的な罠に引っ掛かったな
「お弁当美味しかったよ。御馳走様」
「うまかったぞ」

「うむ大変いい腕じゃ」
うんまったくだ。いい殺し屋になれる
「あ、早いですね。もう食べちゃったんですか」
「ああ、すごくうまかったからつい箸が進んでな」
「そうですか。嬉しいです！」
「いやいや、こちらこそありがとう。ね、雄二」
明久が倒れている雄二に水を向ける
「う・・・うぅ・・・・・。あ、ありがとうな、姫路」
ヤバい、目が虚ろだ
「それは良かったです、実はですね・・・」
姫路がごそごそとカバンを探る。ん？なんだ？
「デザートもあるんです」
悪夢再来
「ああっ！姫路さんあれはなんだ！」
「明久！次は俺でもきっと死ぬ！」
雄二が命がけで明久の計画を阻止する。誰だって毒と分かっているものをもう一度食べようとは思はないだろう
（明久！俺を殺す気か！）
（仕方ないだろ。諦めて早く逝くんだ）
（馬鹿を言うな誰があんなもの二度も食うか）
二人が言い争っていると、秀吉がすっと立ち上がった
（・・・わしが行こう）
（馬鹿を言うな！）
（そうだよ秀吉。死んじゃうよ！）
（お前ら俺のことは率先して犠牲にしたよな）
（そりゃ雄二はどうなってもかまわないからな）
（ぶっ殺すぞ！）
（大丈夫じゃ。わしの胃はかなりの強度を誇る。せいぜい消化不良程度じゃろう）
「どうかしましたか？」

「あ、いや、なんでもない」
「あ、もしかして」
姫路が顔を曇らせる。・・・バレたか！？
「すいません。スプーンを教室に忘れてきちゃいました」
確かにバッグにはスプーンが入っていなかった
「取ってきますね」
そう言って、階下へと消える姫路
「ではこの間にいただいておくとするかの」
秀吉が容器を手に取る
「すまん、恩にきる」
「ごめん、ありがとう」
「ああ、今度なんか奢るよ」
申し訳なさ過ぎてうつむく俺たちにふっと笑いかけ
「別に死ぬわけではあるまい。そう気にするでない」
「そ、それもそうだね」
「ああ、秀吉。頼んだぞ」
「任せた」
「うむ、任せておけ」
秀吉は一気にかきこんだ
「むぐむぐ、なんじゃ、意外と普通じゃとゴバぁっ」
「「・・・雄二」」
「・・・なんだ？」
「「・・・さっきは無理やり食べさせてごめん（悪かったな）」」
「・・・分かってもらえたならいい」
自称『鉄の胃袋』は白目で泡を吹いていた

四限目　実力

問題　以下の英文を訳しなさい
Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｂｏｏｋｓｈｅｌｆ　ｔｈａｔ　ｍｙ　ｇｒａｎｄｍｏｔｈｅｒ　ｈａｄ　ｕｓｅｄ　ｒｅｇｕｌａｒｌｙ.

姫路瑞希、風島恭介の答え
これは私の祖母が愛用していた本棚です

教師のコメント
正解です。きちんと勉強していますね

土屋康太の答え
これは

教師のコメント
訳せたのはＴｈｉｓだけですか

吉井明久の答え
☆●◆▽？♪＊×

教師のコメント
出来れば地球上の言語で

キーンコーンカーンコーン

昼休み終了のベルが鳴り響く。Ｂクラス戦開始の合図だ

「よし、行ってこい！目指すはシステムデスクだ」
『サー、イエッサー！』
敵を教室に押し込むのが目的なので、勢いが重要となる
明久たちはほぼ全力でBクラスへと向かう廊下をかけて行った。教室に残ったのは俺、雄二、秀吉の三人だけだ。ムッツリーニは戦場の偵察に行っている
「わしは行かんでよいのか？」
秀吉は俺が残るように言っておいたのだ
「ああ、ちょっと話がある」
「で？なんなんだ？話って」
「Bクラスの代表だがあの根本らしい」
「なんじゃと」
根本恭二という男はとにかく評判が悪い。カンニングの常連だの手段を選ばないだのロクなうわさを聞かない。用心はしておいたほうがいいだろう
「なるほど、つまりわしはそれを明久たちに伝えればいいのじゃな？」
「ああ。それところ合いを見て一度戻るように伝えておいてくれ」
「了解じゃ」
そう言って秀吉は教室を出て行った。そのすぐあとにBクラスから使者がやってきた。協定を結びたいらしい。その協定の内容というのが『本日の四時までに決着がつかなった場合、明日の午前九時まで持ち越しにし、その間の一切の試召戦争に関する行為を禁止する』というものだった。あの根本がこんな俺たちにとって都合のいい協定を持ちかけてくるのは妙だったが、姫路が体力勝負だときつそうだったので協定を結ぶことにした
「でも本当に良かったのか？」
「何がだ？」
俺たちは協定の調印を済ませ教室に戻っているところだった
「あの協定だよ。あの根本がこんな俺たちに都合のいい協定を持ち

出すなんておかしい」
「ああ、だがこのまま続けるのは姫路の体力的に無理がある。お前が姫路の代わりに前線に出てくれるなら別だが」
「冗談」
俺は今回サポートとして協力しているが、前線に出たりする気はさらさらなかった
「そう言うだろうと思ったからこの協定を結んだんだよ。他にどうしようもないだろ？」
「まあ、いいけどな」
協定の話はそれで終わりにし、俺たちは教室に戻った

★

「酷いな・・・」
「まさかこうくるとはの」
「卑怯、だね」
教室に戻るとすでに明久たちが帰ってきていて、教室の前で立ち尽くしていたので何かと思い中を覗き込んでみたら、そこには穴だらけになった卓袱台とへし折られたシャーペンや消しゴムがあった。しかし俺の頭は別のことでいっぱいだった
（この程度のことしかされてないなんておかしい）
こんなくだらない嫌がらせのためにあの協定を結ぼうとするとは思えなかった
（つまりまだ何かある、あの協定を結んでもまだ奴らにとって有利となる何かが、だとしたらそれは・・
・「恭介？」ッ！）
「どうした」
「どうしたじゃないよ、ずっと難しい顔をして何か考えこんでたみたいだから」
気が付いたらもう秀吉はいなくなっていた。恐らく前線に戻ったの

だろう。どうやら俺はかなり長い間考え事をしていたらしい
「いや、なんでもない。」
「ホントに？」
「ああ、俺のことはいいからお前は前線に戻れ、秀吉だけじゃきついだろうからな」
「うん。了解」
そう言って明久も前線に戻っていった

★

四時を回り、今は協定どうり休戦中となっている
「一応計画どうり教室前には攻めこめたな。もっともこちらの被害も少なくないが」
雄二がこちらの被害を書いたメモを読み上げる。これも予想のうちではあるがこちらの被害も相当デカイ
「でもハプニングはあったけど一応は順調だね」
「まぁな」
根本は今のところはおとなしい、だが油断はできない
「・・・・・・（トントン）」
「お、ムッツリーニか。何か変わったことはあったか？」
気がつけばムッツリーニがそばに来ていた。偵察から戻ったのだろう
「ん？Cクラスの様子がおかしい？」
「・・・・・・（コクリ）」
「漁夫の利を狙うつもりか。いらしい連中だな」
「どうするの雄二」
「Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラスを使って攻め込ませるぞ、とか言って脅してやれば俺たちに攻め込む気もなくなるだろ」
「それに、僕たちが勝つなんて思ってないだろうしね」
「よし、それじゃ今から行ってくるか」
「そうだね」

Cクラスへ向かおうとする明久と雄二
「ちょっと待て」
俺はそれを引きとめる
「どうしたの恭介？」
「行かないほうがいい」
「何故だ？」
「俺たちは今試召戦争に関する一切の行為を禁じられてる。忘れたのか」
「え？でもそれはBクラスとの協定でCクラスとは関係ないじゃないか」
「Bクラスの代表は根本だぞ？屁理屈を言ってくるにきまってる。それと聞いた話だとCクラス代表の小山は根本と付き合っているらしい」
「本当！？」
「ああ、状況的に考えてCクラスとBクラスが手を組んでいる可能性は高い。ここでCクラスに向かうのは自ら罠にかかりに行くようなものだ」
「ふむ、お前はどうすべきだと思う？」
「俺に考えがある」
「考え？」
「ああ、明日の朝に実行する。目には目を、だ」
この日はこれで解散となり、続きは明日へ持ち越しになった

★

「それで、昨日行ってた作戦って何？」
翌朝、登校して開口一番に明久がそう言う
「秀吉にこれを着てもらう」
そう言って俺は鞄からうちの学校の女子の制服を取り出す
「そんなものどうやって手に入れたのさ！？」

明久が引き気味に聞いてくる。どうやら何か勘違いしているようだ
「美波に予備の制服を貸してもらっただけだ。勝手に勘違いして人を変態扱いするな！」
「あ、なんだ島田さんのか」
「わしは別にかまわんが、女装をしていったいどうするのじゃ？」
「秀吉には木下優子として、Ａクラスの使者を装ってもらう。そして、ここで徹底的にＣクラスを罵倒するようなことを言ってこい」
「なるほど、それでＣクラスにＡクラスに対して宣戦布告をさせる気だな？」
「そういうことだ」
説明を終え、着替え終わった秀吉を連れて俺は教室を出た

★

午前九時から予定どうりＢクラスとの戦いが再開された。Ｃクラスへの挑発はうまくいき、現在ＣクラスはＡクラスに対して戦争の準備をしている
「作戦はうまくいったな」
「ああ、これでとりあえずの危機は回避されたはずだ」
「となると、気になるのは根本だな」
根本はなんのアクションも起こしていないが油断はできない。いつ何をされても対応できるようにこちらも準備する必要がある。雄二と作戦について話し合っていたところに突然明久が猛烈な勢いで教室に飛び込んできた
「雄二っ！」
「うん？どうした明久。脱走か？チョキでシバくぞ」
雄二がふざけたような口調で言う
「話があるんだ」
それに対して明久はいつもとは違う真面目な表情で返す
「・・・とりあえず、聞こうか」

「根本君の制服がほしいんだ」
変態かっ！
「・・・お前に何があったんだ」
その言葉には激しく同感だった。真面目な表情をして何を言うのかと思ったら、よりにもよって根本の制服がほしいと言い始めるとは・・・とうとう目覚めたのか？
「ああ、いや、その。えーっと」
「まぁいいだろう。勝利の暁にはそれぐらいなんとかしてやろう」
いいのかよ！あぁなんだかもうどうでもよくなってきた
「で、それだけか？」
あきれた表情で明久を見る雄二。その気持ちはよくわかる
「それと、姫路さんを今回の戦闘から外してほしい」
「なに？どういうことだ」
姫路は今回の作戦のキーマンだそれを外せというのだからとても正気とは思えない。だが明久は別に気がおかしくなったような感じでもなかった。
（つーことはさっきの根本の制服がどうのという奴か）
「理由は？」
「言えない」
「どうしても外さないとだめなのか？」
「うん、どうしても」
雄二が顎を手に当てて考える
姫路が抜けるのは戦力ダウンなんてレベルじゃない。姫路は今のＦクラスの生命線ともいえる存在だ。それを戦闘から外せというのだから、クラスの代表としては悩むのは当然のことだった
「頼む、雄二！」
明久が頭を下げて頼みこむ。こいつが雄二に対して頭を下げるなんてよっぽどのことがない限りない。・
・・つまりそれだけ切羽詰まった状況なのだろう
「雄二」

「なんだ？」
「俺が姫路の代わりをする」
明久と雄二が驚いて目を見開く
「え？でも恭介にも役割があるんじゃ」
「あっちはムッツリーニだけでどうとでもなる。どうせ俺はもしもの時の保険だったからな」
「いいのか？」
雄二がきいてくる
「ああ、どうやらそれなりの理由があるみたいだからな。特別だ。ただし明久もこい」
「うん、わかった」
「それなら姫路を戦線から外すのを許可してやろう。そのかわり失敗するなよ？」
「ふん、誰に向かって言ってるんだ？」
俺は不敵に笑って言った
「それじゃ、うまくやれよ？」
そう言って雄二は教室を出ようと立ち上がる
「え？どこか行くの？」
「Dクラスに例の指令を出してくる」
恐らく例の室外機だろう
「あの、恭介」
「ん？なんだ？」
「ありがとう」
「気にするな。それよりいくぞ」
「ああ。あの外道に目に物見せてやろう」
俺たちはBクラスへと向かった

★

「根本！」

俺たちはBクラスの入り口にたどりついた。Fクラスの連中が道を作ってくれたおかげで戦闘なしでここまでこれた
「なっ！風島」
『どういうことだ！』
『奴は前線には出てこないんじゃなかったのか？』
残っていた奴らから焦りの声が上がる。俺が出てくるのは予想外だったのだろう
『落ち着け！数ではこちらが上。一気にたたみかけるんだ。試獣召喚っ』
「ふん、舐められたもんだな。行くぞ明久っ！」
「「試獣召喚っ！」」
点数が表示される

数学　Bクラス　工藤&真田&山本　１５６点&１６２点&１５８点
VS
Fクラス　風島&吉井　８５４点&５１点

『なんだあの点数は』
「落ち着けお前たち数ではこっちが上なんだ」
「ハッ！馬鹿が。お前はもうとっくに詰んでんだよ」
「何！」
次の瞬間窓から二人の人物が入ってきた。ムッツリーニと鉄人だ
「・・・Fクラス土屋康太」
「き、きさま」
「・・・Bクラス根本恭二に保健体育勝負を申し込む」
「ムッツリィニィーーッ」
俺たちが近衛部隊を引きつけた今、根本を守るものは何もない
「・・・試獣召喚」

保健体育　Bクラス　根本恭二　２０３点

ＶＳ

Ｆクラス　土屋康太　４４１点

ムッツリーニの召喚獣は手にした小太刀で敵を一閃。勝負は一瞬でついた

今ここに、Ｂクラス戦は終結した

五限目　本気

問題　以下の文章の（　）に正しい言葉を入れなさい
光は波であって、（　）である

姫路瑞希、風島恭介の答え
粒子

教師のコメント
よくできました

土屋康太の答え
寄せては返すの

教師のコメント
君の解答はいつも先生の度肝を抜きます

吉井明久の答え
勇者の武器

教師のコメント
先生もＲＰＧは好きです

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」
「・・・」

根本はさっきまでの強気が嘘のようにおとなしい
「本来なら設備を交換してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」
雄二の発言に、周囲の連中がざわざわと騒ぎ出す
「落ち着け、みんな。前にも言ったが、俺たちの目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない」
「うむ。確かに」
「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件をのめば解放してやろうと思う」
「・・・条件はなんだ」
力なく根本が問う
「条件？それはお前だよ、負け組代表さん」
「俺、だと？」
「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」
酷い言いようだがこいつはそれだけのことをやってきている。だから誰もこいつを庇おうとはしない
「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ。Aくらすにいって、試召戦争の準備ができていると宣言してこい。そうすれば今回は設備に関しては見逃してやってもいい。ただし宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまで戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」
「・・・それだけでいいのか？」
疑うような根本の視線。本当ならこれだけだったんだがな・・・
「ああ。Bクラス代表がこれを着て言ったとうりに行動したら見逃そう」
そう言って取り出したのは、先ほど秀吉が来ていた女子の制服
これは明久の要望の制服を手に入れるための手段だ。なんとなく雄二の個人的な感情が入ってる気がするが
「ば、馬鹿なことを言うな！この俺がそんなふざけたことを・・・」

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』
『任せて！必ずやらせるから』
『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな』
「んじゃ、決定だな」
「くっ！よ、寄るな！変態ぐふぅ！」
「とりあえず黙らせました」
「お、おう。ありがとう」
一瞬で代表を見限って腹部に拳を打ち込んだBクラス男子。あまりの変わり身の早さに流石の雄二も驚いている。俺もこの変わり身の早さには若干引いていた
（どんだけ人望ないんだこいつ）
哀れみの目で根本を見る
「では、着付けに移るとするか。明久、任せたぞ」
「了解っ」
明久はぐったりと倒れている根本に近ずき、制服を脱がせる
「う、うぅ・・・」
うめき声を上げる根本。まずいな起きるかもしれない
「おらっ！」
「がふっ！」
念のため追加攻撃をくわえておく
「ありがと恭介」
「さっさと済ませろよ」
「うん、わかってる」
見慣れた男子の制服を脱がし、女子の制服をあてがう
「うーん・・・これどうするんだ？」
「私がやってあげようか？」
Bクラスの女子の一人がそう提案してきた
「そう？悪いね。じゃあ、せっかくだし可愛くしてあげて」
「それは無理。土台が腐ってるから」
同感だ

「じゃ、よろしく」
明久は女子に根本をたくし、手に根本の制服を盛ってその場を去った。おそらくFクラスの教室に戻るのだろう
その後、着付けが終わり目を覚ました根本を見てみると
「こ、この制服やけにスカートが短いぞ」
目をふさぎたくなるほど気持ちの悪い姿になっていた。おぇ、夢に出そうだ
「いいからキリキリ歩け」
「さ、坂本め！よくも俺にこんなことを・・・」
「無駄口をたたくな！これから撮影会もあるから時間がないんだぞ！」
「き、聞いてないぞ！」
ちなみに撮影会を提案したのは俺だ。どうせだからトラウマになるぐらいに恥ずかしい思いをさせてやろうと思ったのだ
「この俺がこんな目に。く、屈辱だ・・・」
今日は根本にとって一生忘れられない日になるだろう

★

そして点数補給のテストを終えた次の日の午後。俺たちはAクラスに宣戦布告に来ていた
「一騎打ち？」
「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む」
今回は代表である雄二を筆頭に、俺、明久、姫路、美波、秀吉にムッツリーニと首脳陣勢ぞろいでAクラスに来ていた。Aクラスは秀吉の姉である木下優子が代表として交渉している
「お断りするわ。そんなリスクの高い勝負は受けられないもの」
「姫路や風島を警戒してるのか？それなら心配しなくてもこちらからは俺が出る」

「信用できるわけないでしょ」
ま、賢明な判断だな
さて、雄二のお手並みを拝見させてもらうか
「じゃあ質問だがBクラスとDクラスを相手にする気はあるか？」
脅迫かよ
「・・・それって脅迫？」
「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」
絶対脅迫だろ。なんだか雄二が根本に見えてきたな
「じゃあこっちから提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて五対五の一騎打ちで三回勝ったほうが勝ちって言うのなら受けてもいいよ」
「いいだろう。そのかわり科目の選択権は俺たちがもらう。そのぐらいのハンデはあっていいはずだ」
恐らく雄二はこうなることを想定していたのだろう。やはり悪知恵だけは働く奴だ
「え、うーん・・・」
考え込む木下。クラスを代表しての交渉だ。慎重になるのも無理はないだろう
「・・・受けてもいい」
出てきたのは霧島翔子。Aクラスの代表、要するに二年で一番高い成績の持ち主だ。・・・まあ俺をのぞいたらの話だが
「え？代表。いいの？」
「・・・そのかわり条件がある」
「条件？」
「・・・負けた方はなんでも一つ言うことを聞く」
また妙な提案だな
「いいだろう。交渉成立だな」
あっさり承諾した雄二。いいのか？それで
「・・・勝負はいつ？」
「そうだな。明日の正午からでいいか？」
「・・・わかった」

「交渉成立だな。それじゃ言ったん教室に戻るぞ」
「そうだね。皆にも報告しないといけないからね」
俺たちは交渉を終え、Ａクラスを後にした

★

放課後。俺は美波と一緒に帰っていた
「明日で試召戦争も終わりね」
「そうだな」
「明日勝てばうちらの教室がＡクラスの設備になるのよね」
「そうだな」
「さっきからそうだ名ばっかりだけど聞いてるの？」
「ああ」
美波が立ち止まる。生返事ばかりしていたから機嫌を悪くしたのだろうか
「ねえ・・・恭介」
「なんだ」
「この試召戦争がはじまったときから思ってたんだけど、やっぱり恭介には今回のこともどうでもいいことなんだよね」
・・・やはりこいつには見透かされていた
「はじまったときから分かってたの。私たちと違って恭介は本気で取り組んでいる訳じゃないって。同じ場所にいるはずなのに見ているものは全然違うんだって」
確かに俺は今回の試召戦争に本気で取り組んでいわいなかった。・・・いや、今回の試召戦争だけじゃないか。俺は今までどんなことにも本気で取り組んだことなんてなかったのだ
「恭介がこういうこと好きじゃないのも面倒事が嫌いなのも知ってる。でもね・・・」
「でも？」
「・・・たまには本気を出してみてもいいんじゃない」

美波はそう言って走って行った。俺はそれを追うことができずただ立ち尽くしていた
（たまには本気を出してみてもいいんじゃない）
そう言った美波の顔は、少し寂しげだった

★

朝。昨日俺は結局寝ることができなかった
理由は分かっている。昨日の夕方の美波との会話がずっと胸に引っ掛かっていたのだ
俺は今まで何かに本気で取り組んだことはなかった。本気でやらなくてもいつもどうにかなってきたし、何よりもそうする本気を出すということが俺にとって馬鹿馬鹿しいことでしかなかったからだ。
だが、俺は昨日のあいつの言葉が忘れられなかった
（たまには本気を出してみてもいいんじゃない）
そう言ったあいつの寂しげな表情が引っかかって
（本気を出す、か）
時計を見る。時刻はもう六時半。いつもならまだ寝ている時間だが
俺はベッドを出た
（一回ぐらい、やってみてもいいか）

★

早朝の学校
俺はいつも時間ぎりぎりに来ることが多いので、妙な気分だった
教室のドアを開ける。教室にはまだ雄二しかいなかった
「どうした恭介。こんなに早く来るなんてお前らしくもな「俺にテストを受けさせろ」どういうことだ？」
雄二が怪訝な顔つきできいてくる。雄二は俺の性格を知っている。
不審に思うのも無理はないだろう

「今日のAクラスとの対決、姫路が出る予定のところを俺に出させろ」
「それはかまわないが、それだけならテストを受けなおす必要はないはずだ。お前の点数ならAクラスだろうと一捻りだろう」
「今の点数じゃ意味がないんだ。俺が全力でやった点数じゃないと」
雄二は顎に手を当てて考え込む。俺の真意を測りかねているのだろう
「・・・いいだろう」
雄二は了承してくれた
「ありがとよ」
「ただし条件がある」
「条件？」
「やるからには全部出し切れ。半端な点数出してきたらぶっ飛ばす。Aクラスの連中の度肝を抜いてやれ」
「当たり前だ」
俺は笑って返した

★

試験をを受け終え、俺はAクラスに向かっていた
テストは自分でも驚くほど解けた。頭がすっきりしていつもの数段早いペースで解き進むことができ、担当の教師も驚いていた
（もう対決は始まっているはずだ、急がねえとな）
Aクラスに着くと中から声が聞こえてきた
「勝者、土屋康太」
どうやらムッツリーニが勝ったようだ
「これで二対一ですね。次の方どうぞ」
二対一ってことはまだ三回戦までしか終わってないようだ。ぎりぎり間に合った
「じゃあ、私が「俺が出る」」
「恭介！」

「やっと来たか」
「悪い、遅れた」
「遅れたのはいいとして俺が出るってどういうこと？」
明久が不思議そうに聞いてくる。どうやら雄二は話してないようだ
「朝こいつにいきなり頼まれたんだよ。姫路の代わりに俺を出せってな」
「きょ、恭介が！？」
明久が驚愕に目を見開いている。無理もないだろう、こいつも俺の性格はよく知っているのだから
「まあそういうことだ。悪いがここは譲ってもらうぞ、姫路」
「・・・分かりました。ここはお任せします」
「悪いな」
俺はＡクラスの連中に向き直る。どうやら向こうは学年自責の久保が出てくるようだ
「正直君が出てくるとは思わなかったよ。こういったことは嫌いと聞いていたんだがね」
「実際嫌いさ」
「ならどうして出てきたんだい？」
「ただの気まぐれだ」
「科目はどうしますか？」
俺と久保が話している横から高橋先生が科目を聞いてきた
「総合科目でお願いします」
「総合科目ですね。それでは始めてください」
開始の合図が出る
「学年トップといわれる君の実力見せてもらおう。試獣召喚」
「言われなくても見せてやるよ。試獣召喚」

総合科目　Ａクラス　久保利光　３９９７点
ＶＳ
Ｆクラス　風島恭介　１７８６９点

「なっ！」
『馬鹿な！』
『あんな点数取ることが可能なのか？』
『化け物だ！』
その場にいた全員が俺の点数を見て驚愕の色を隠せずにいた。俺自身も驚いている。俺の総合科目の点数はいつも七千点台後半ぐらいで、調子がいい時でも八千点台中盤ぐらいの点数だった。この点数はその倍以上だ
「ま、まさかこれほどの実力とは・・・」
「受け取れよ、俺の全力っ！」
俺の召喚獣の腕輪が光りだす。俺の召喚獣の持つ大太刀に極大の雷が宿り、敵を一閃。久保の召喚獣は一瞬で消えた
「勝者、風島恭介」
「凄いよ恭介！あんな点数が取れるなんて！」
「やりやがったな」
「うむ、流石恭介じゃ」
「本当にすごいです！」
「・・・・・・（こくこく）」
皆が俺を称賛してくれた
（たまには、こういうのもいいのかもな）
そう思っていたところへあいつがやってきた
「美波」
昨日のことがあったため俺はなんと話しかければいいのか分からなかった
「恭介」
何を言うか考えているところへ美波が声をかけてくる
「かっこよかったわよ」
そう言った美波の顔は笑顔だった
「あ、ああ・・・ありがとな」

なぜか俺は美波の顔が直視できなかった。なんというか・・・それだけその時の美波の笑顔は・・・可愛かった
（な、なんだ。鼓動が速くなってきたぞ）
俺がドギマギしてる中、高橋先生の声が聞こえてきた
「最後の一人、どうぞ」
「・・・はい」
Ａクラスからは霧島翔子。ウチのクラスからは当然、
「俺の出番だな」
坂本雄二。こいつしかいない
「教科はどうしますか？」
「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」
日本史で小学生レベル？しかも上限ありだと？
『上限ありだって？』
『しかも小学生レベル。満点確実じゃないか』
『集中力勝負になるな・・・』
確かにこれなら勝ち目はあるが・・・あの雄二がこんな運任せなやり方をするとは思えない
「どういうことだ？雄二」
「ああ、他の奴には話したがお前にはまだだったな」
恐らく俺がテストを受けている時だろう
「俺と翔子が幼馴染なのは話したな？」
「ああ」
「俺はな、昔あいつに大化の改新が起こったのは６２５年と間違って嘘を教えたんだ。あいつは一度覚えたことは忘れないからな、その問題が出れば・・・」
「確実に間違える、なるほど。そういうことか」
「そうだ」
確かにそれなら雄二にも勝てる可能性は十分ある
「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本

君は視聴覚室に向かってください」
高橋先生がクラス代表二人に声をかける
「・・・はい」
「じゃ、行ってくるか」
「負けんなよ」
「ああ」
「皆さんはここでモニターを見ていてください」
壁のディスプレイに視聴覚室の様子が映し出される

『では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は百点です」
日本史担当の飯田先生が問題用紙を裏返しのまま二人の机に置く
『不正行為は即失格になります。分かりましたね」
『・・・はい』
『分かっているさ』
『では、始めてください』

「いよいよだね、恭介」
「ああ」
「これであの問題が出なかったら坂本君は・・・」
「集中力や注意力に劣る以上、延長戦では負けるだろうね。でも」
「ああ。もし出ていたら」
「うん」
もし出ていたら、俺たちの勝ちだ

次の（　）に正しい年号を記入しなさい
（　）年　平城京に遷都
（　）年　平安京に遷都
流石は小学生レベルの問題、明久でも分かりそうだ。これなら出ているか・・・

（　）年　鎌倉幕府設立

（　）年　大化の改新

「あ・・・」
出て、いた・・・
「きょ、恭介」
「ああ」
「これで僕たちッ・・・！」
「ああ！これで俺たちの卓袱台が」
『システムデスクに！』
そろったＦクラス全員の言葉
「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！」
『うぉぉっ！』
教室を揺るがすような歓喜の声
しかし、俺たちはある重要なことを忘れていた。雄二は・・・

日本史勝負　限定テスト　１００点満点
Ａクラス　霧島翔子　９７点
　　ＶＳ
Ｆクラス　坂本雄二　５３点

・・・雄二は馬鹿なんだということを
この日俺たちの教室の卓袱台がミカン箱になった

腕輪紹介

雷閃　武器の大太刀に雷をまとわせて攻撃する。攻撃力は消費した点数に応じて増す。攻撃力に上限はないが高出力で連発すると一気に点数を消費してしまうので多用は禁物

五限目　本気（後書き）

次回から新章に突入します

プロローグ　胸中

学園祭の出し物を決めるためのアンケート
あなたが今ほしいものはなんですか？

姫路瑞希の答え
クラスメイトとの思い出

教師のコメント
なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物もよいかもしれませんね。写真館とかも候補になり得ると覚えておきます

土屋康太の答え
Ｈな本（訂正）　成人向けの写真集

教師のコメント
訂正の意味があるのでしょうか

吉井明久の答え
カロリー

教師のコメント
この回答に君の生命の危機が感じられます

風島恭介の答え
静かな時間

教師のコメント
心中察します

Aクラスとの試召戦争からしばらくして、俺たちの通う文月学園では、新学年最初の行事である『清涼祭』の準備が始まっていた
「さて。そろそろ春の学園祭、清涼祭の出し物を決めなくちゃいけない時期なんだが・・・とりあえず、議事進行並びに実行委員として島田を任命する。島田に全権をゆだねるので、あとは任せた」
心底どうでも良さそうに言う雄二。こいつは自分の興味のないことにはとことんやる気がない
「え？ウチがやるの？う～ん・・・、ウチは召喚大会に出るから、ちょっと困るかな」
「え？島田さん召喚大会に出るの？」
「なんでも姫路と一緒に出るらしいぞ」
「え？姫路さんと？」
「ウチは瑞希に誘われてなんだけどね」
「家でFクラスのことをいろいろ言われたらしい、それで見返してやりたいらしいぞ」
まあ、姫路の父親がいろいろ言いたくなるのも無理はないが
「だからFクラスのウチと組んで、召喚大会で優勝してお父さんの鼻をあかそうってわけ」
実力学年三位の姫路と問題さえ読めればそこそこの点数の美波が組めば優勝も不可能ではないだろう
「四人とも。こっちの話を続けていいか？」
「あ、ごめん雄二。島田さんが実行委員になる話だったよね」
「だからウチは召喚大会に出るって言ってるのに」
「なら、サポートとして恭介を副実行委員に任命しよう。それならいいだろう？」
「おい、だからなんでそこで俺なんだよ。そういうことは明久にやらせればいいだろ」

また面倒事はごめんだぞ
「何言ってるんだ、明久に任せたら永久に話し合いが進まないだろう」
「ああ・・・」
「どういう意味だよ！ていうか恭介も反論してよ！」
残念ながらそれは無理だ。反論しようにも反論できる点がない
「いや、でも俺じゃなくても・・・」
「なによ、恭介はウチと一緒じゃやなの？」
美波が怒ったような口調できいてくる
「いや、そういう訳じゃねえけど」
「じゃあなによ」
そう言いながら美波が俺に迫ってきた。別に俺は美波と二人なのが嫌という訳ではなかった。ただ・・・なんというか、Ａクラスとの対決以来、俺はこいつの顔がまともに見れなくなっているのだ。こいつの顔を見るだけで鼓動が速くなってしまう。だが口が裂けてもそんなことは言えなかった
「そこら辺にしとけ。恭介ももう観念するんだな」
「・・・わかったよ」
こうして俺は何かもやもやしたものを胸に抱えたまま美波とともに実行委員をすることとなった

六限目　事情

問題　バルト三国と呼ばれる国名をすべて答えなさい

姫路瑞希、風島恭介の答え

リトアニア　エストニア　ラトビア

教師のコメント

そのとおりです

土屋康太の答え

アジア　ヨーロッパ　浦安

教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります

吉井明久の答え

香川　愛媛　徳島　高知

教師のコメント

正解不正解の前に、数が合っていないことに違和感を覚えましょう

「ねえ、ちょっといい？」

放課後ＨＲも終わり帰ろうとしていた俺たちに美波が声をかけてきた

「何だ。何か用か、島田」

「うん、ちょっと」

「姫路のことか？」
俺がそういうと美波は少し驚いた表情をした
「あんた知ってたの？」
「ただ父親を見返したいだけにしては妙に姫路が意気込んでたからな、何かありそうだと思っただけだ」
「え？姫路さん何かあったの？」
「それがこのままだと瑞希が転校することになるかもしれないの」
「え！姫路さんが！」
「することになるかもしれないってのはどういうことだ？」
「瑞希の両親がFクラス授業を受けることを心配してるんですって」
ああ、なるほど。そういうことか
「確かにな。この劣悪な環境で成績最下位の連中と過ごしてるだ。心配になるのも無理はないだろう」
雄二の言うとおり、この劣悪な環境を姫路の両親が心配するのは無理もないことだ
「それであんなに召喚大会で勝ちたがってたのか」
たしかにFクラスの美波と召喚大会で優勝することができれば多少は姫路の両親も見直してくれるだろう
「そうなると問題点は三つだな」
「問題点？」
「姫路の両親が転校を進めた要因だよ。まず一つ目はFクラスの設備だな。ござとミカン箱じゃとても勉強をするのに快適な環境とは言えないからな。まあこれは喫茶店（話し合いの結果俺たちのクラスは中華喫茶をすることになった）が成功すれば利益で何とか出来るだろう」
「二つ目は老朽化した教室。姫路は体が弱いから健康に害が出る環境はよくない」
「一つ目は道具で、二つ目は教室自体ってこと？」
「ああ。こっちは喫茶店の利益だけじゃ無理だからな。学校側の協力が必要だ。そして最後の三つ目はレベルの低いクラスメイト。要

するに姫路の成長を促すことのできない環境だな」
勉強に限らず成長には自らの実力に近い競争相手が必要だ。Ｆクラスにいる限りそんな競争相手は望めない
「まいったね。随分と問題だらけだ」
「そうでもない。一つ目はさっきも言った通り喫茶店が成功すれば何とかなるし、三つ目は姫路と美波が召喚大会で優勝すれば問題ない」
「そんな簡単に行くかな。霧島さんとかが参加してきたら難しいんじゃない？」
そこに雄二が「大丈夫だ」と言ってきた
「翔子はこういった行事には関心がないからな」
「そっか。それなら何とかなりそうだね。それで恭介二つ目はどうするの？」
「んなもん学園長に直訴すればいいだけだろ。ここは仮にも教育機関だからな、生徒の健康に害が出るような状態なら改善要求は当然の権利だ」
「それじゃあ早く行こうよ」
「そうだな、じゃあ美波と秀吉は残って学園祭の準備計画でも考えておいてくれ。あと鉄人を見かけたら俺達は帰ったと言っておいてくれ」
「うむ。了解じゃ」
俺と明久と雄二は学園長室を目指して教室を後にした

★

「そういう訳であの腐った教室をさっさと直せ、クソババァ」
俺たちは教室の改善を要求するために学園長室に来ていた
「本当に失礼なクソガキだねぇ。礼儀ってもんを知らないのかい？」
ため息をつきながらそう言うのは長い白髪が特徴の藤堂カヲル学園長だ。というか人に礼儀とか言っておいててめぇもクソガキって言

ってるじゃねえかよ
「んなコたどうでもいいからさっさと直せ、ババァ」
「そうです、早くあの最悪な教室を何とかしてください、ババァ」
俺に続くように明久と雄二もいう
（ふむ、ちょうどいいタイミングさね）
ん？今何か小声で言わなかったか？
「よしよしお前たちの言いたいことはよくわかった」
「え？それじゃ直してもらえるんですね」
「却下だね」
「どういうことだ、クソババァ」
「そうだ、理由を聞かせろ、クソババァ」
「そうですね、教えてください、クソババァ」
とうとう明久と雄二もクソをつけ始めた
「・・・お前たち、本当に聞かせてもらいたいと思ってるのかい？」
学園長が呆れ顔で俺たちを見る。はて？なにもおかしなことは言っていないはずだが
「理由も何も、設備に差をつけるのはこの学園の教育方針だからね。がたがた抜かすんじゃないよ、なまっちろいガキども」
このクソババァを殴り倒したい衝動に駆られたが、そこはひとまず抑えた
「それは困ります！そうなると、僕らはともかく体の弱い子が倒れて」
「・・・と、いつもなら言ってるんだけどねぇ」
明久の言葉を遮り、学園長が顎に手を当てて続きを話し始める
「可愛い生徒の頼みだ。こちらの頼みをきくなら、相談に乗ってやろうじゃないか」
交換条件か。それにしても・・・妙だな
「・・・・・・」
雄二もなにやら思案顔になっている。恐らく俺と同じく何か引っかかってるんだろう

「その条件って何ですか？」
黙り込んでいた俺と雄二の代わりに明久が前に出て話を促す
「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」
「ええ、まぁ」
「じゃ。その優勝賞品は知ってるかい？」
「え？優勝賞品？」
「確か『白銀の腕輪』と『如月ハイランド　プレオープンプレミアペアチケット』だったか？」
ペアチケット、と聞いて雄二がビクッと反応した。どうかしたのか？
「そうさ」
「はぁ・・・。それと交換条件に何の関係が？」
「話は最後まで聞きな。慌てるなんとかはもらいが少ないって言葉を知らないのかい？」
明久は知らないだろうな
「この副賞のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。出来れば回収したいのさ」
「よからぬ噂？」
「如月グループは如月ハイランドに一つのジンクスを作ろうとしてるのさ。ここを訪れたカップルは幸せになれるってジンクスをね」
「それのどこが悪い噂なんです？いい話じゃないですか」
「なるほどそのジンクスを作るのにこの学園の生徒を利用しようとしているってとこか」
「そういうことさ。流石学年トップと言われているだけあるね、そこそこ頭が回るじゃないか」
「どういうこと？」
明久がわからないという顔をしている。やっぱりこいつの頭は容量が足りていないようだ
「今心の中で僕を馬鹿にしなかった！？」
「気のせいだ」
「話を進めてもいいかい？」

「あ、はい。それで結局どういうことなんですか？」
「如月グループはペアチケットを使ってやってきたカップルを結婚までコーディネートするつもりらしい。企業として、多少強引な手段を用いてね」
「なるほど」
明久がようやく納得したように頷く。そこで今まで黙っていた雄二がようやく口を開いた
「つまり交換条件ってのはそのペアチケットを俺たちの手で回収しろってことか？」
「そうさね。それができれば教室の修繕くらいしてやろうじゃないか」
回収ねぇ
「分かりました。この話引き受けます」
「そうかい。それなら交渉成立だね」
学園長は計画どうりといった顔をしてにやりと笑った。やっぱなんか裏あるな
「ただし、こちらからも提案がある」
雄二が学園長に話しかけた。何か仕掛ける気だな
「なんだい？言ってみな」
「トーナメントの対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」
なるほど・・・そういうことか
「ふむ。いいだろう。点数の水増しとかだったら一蹴していたけど、それくらいなら協力してやろうじゃないか」
・・・決まりだな
「・・・ありがとうございます」
雄二の目つきが鋭くなった。どうやら俺と同じ結論に至ったようだ
「それじゃ、坊主ども任せたよ」
話が終わり教室に戻ろうとした時学園長に呼び止められた
「ああ、あんたは残りな」

「俺か？」
「ああ、あんただよ」
俺はチラッと雄二に目配せをする。すると雄二は小さくうなずいた
「分かった。悪いが明久、雄二と先に戻っててくれ」
「？うん。分かった」
明久と雄二が部屋から出て行く
「で、話って何だ？」
「あんた、今の話でどこまでつかんだ？」
「つーことはやっぱり裏があるんだな」
「まあね。どのあたりで気づいたんだい？」
「最初だよ。いくら学校の方針だからって、生徒の健康状態のほうが重要なはずだからな。渋った時点で何かあるのは分かってた。次にチケットの回収を俺たちに頼んだことだ。ただチケットを回収するだけならAクラスの連中にでも頼めばいいし、優勝者に事情を話して回収するだけでも問題ないはずだからな」
「なるほど、それだけかい？」
「最後に決定的だったのがさっきの科目選択だ」
「なるほどね。あれで試されてたってわけかい」
「もしめぼしい出場者全員に声をかけてたんならあんな俺たちだけに都合のいい提案をのむわけがないからな。それをのんだってことはあんたはほかの出場者たちじゃなく俺たち、更に限定するなら明久や雄二に優勝してもらわないと困るってことだ」
「はぁ、さっきのやりとりでそこまで読まれていたとはね」
「あんな嘘でだまされるのは明久ぐらいだ」
実際あいつは何にも気付かなかったからな。この穴だらけの嘘に
「それで、あんたはどう考えてるんだい」
「恐らくだがあんたの狙いはペアチケットじゃなく、白銀の腕輪のほうだ。それをどうしても明久たちに手に入れさせる必要があった。恐らく腕輪のほうに何らかの問題があったからだ。明久たちに頼んだところを見ると点数が高いと使えないとかそんなところだろ。ち

がうか？」
「全く恐れ入ったよ」
「で、話ってのはこの事を口外するなとかそういうことか？」
「ああ、まあそんなところだよ」
まあ学園長の無能をさらすような話だからな
「あともう一つあんたには用があるんだよ」
「もうひとつ？」
「ああ、実は二つの白銀の腕輪のほかにもう一つ、『黒金の腕輪』ってゆうのがあるんだけどね。それをあんたに受け取ってもらいたいのさ」
「俺に？どういうことだ？」
「この黒金の腕輪は白銀の腕輪とは逆、要するにある一定以上の点数がないと使えないんだよ」
「一定の点数？どのくらいだ？」
「総合で九千は必要だね」
九千って・・・教師ですら無理なレベルだろ
「はぁ、それでこの間のＡクラス戦で一万七千オーバーだった俺に使わせようって魂胆か」
「そういうことさ」
確かにあの一件以来俺は全体的に点数が上がり、総合でも一万二千は下らなくなった。そこから考えてもその腕輪は確かに俺にしか使えないだろう
「そんな欠陥だらけの腕輪をなんで俺が受け取らなくちゃいけないんだよ」
「おや、不満かい？そんなら報酬をつけようじゃないか」
「報酬？」
「そうだねぇ。あの馬鹿どもが優勝したら如月ハイランドのペアチケットをあんたにやろうじゃないか」
「はあ？」
何を言ってるんだこのババァ

「気になる女子でも誘って行けばいいんじゃないかい？」
「俺には別にそんな奴・・・」
なぜかそこで唐突に美波の顔が浮かんできた
「・・・いねえよ」
「ほう」
ニヤニヤしながらこっちを見てくるババァ。うぜぇ・・・
「ちっ、まあいい。一応もらっといてやるよ」
「なら受け取りな」
そういってババァは一つの黒い腕輪を取り出した
「これが黒金の腕輪だよ」
「そんで、こいつはどんな効果があるんだ？」
「そんなもん自分で試しな」
やっぱ一発殴りたいなこのババァ
「ともかくさっきの話は誰にも口外するんじゃないよ」
「分かってるよ」
俺は学園長室を後にした

（雄二への言い訳も考えておかねえとな・・・）

そう思いながら

七限目　清涼祭始まる

学園祭の出し物を決めるためのアンケートにご協力ください
喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選らぶべきですか
?可愛らしさ?統率力?行動力?その他
また、その時のリーダーの候補も挙げてください

土屋康太の答え
?可愛らしさ　候補・・・姫路瑞希&島田美波

教師のコメント
甲乙つけがたいといったところでしょうかね

坂本雄二の答え
?その他（結婚相手）　候補・・・霧島翔子

教師のコメント
どうしてAクラスの霧島さんが持ってきてくれたのでしょうか

風島恭介の答え
?可愛らしさ　候補・・・姫路瑞希

教師のコメント
何度も消した跡がありますが誰を書きたかったのでしょう?

「うーん」
「どうしたの？恭介」
「ん？ああ、これだよ」
そう言って俺は黒金の腕輪を見せる（学園長の話はこれを渡すことだけで他には何も言ってなかったと雄二にはいっておいた）
「？それって恭介がもらったっていう黒金の腕輪だよね。それがどうかしたの？」
「効果がわからん」
「どういうことだ？」
雄二も話に加わってきた
「どうもこうも言った通りだよ。あの後使ってみたはいいんだが何の効果があるのかさっぱりわからん」
「使っても何も起こらなかったってこと？」
「いや、一応召喚フィールドがはれたんだけどな・・・」
「？使えてるじゃないか」
「あのなぁ、それだと白銀の腕輪とおんなじだろうが。総合が九千点オーバーじゃなきゃ使えない腕輪なんだぞ？それだけのわけがないだろうが」
「科目選択ができるとかじゃないのか？」
「いや、試してみたけど総合科目で固定だった」
「そっか、それじゃあ何か他に特殊な力が隠されてるってことだよね」
「たぶんな」
そうでなければあのババァがこんなもんを俺に渡すはずがない
「ふむ。まあそれも気にはなるが今はこっちに集中してくれよ？」
今日は清涼祭の初日だ。俺たちの教室はいつもの小汚い様相を一新して、中華風の喫茶店に姿を変えていた
「んじゃ、俺はちょっと出てくるからその間任せたぞ」
「ああ、わかった」
ふう、と一息つく

「にしても大分ましになったな」
「本当だよ。このテーブルなんてパッと見は本物と区別がつかないよ」
教室の至る所に設置してある立派なテーブル。しかし、実はこれ俺たちの教室にあったミカン箱を積み重ねた上にクロスをかけただけのものだったりする
「あ、それは木下君が作ってくれたんですよ。どこからか綺麗なクロスを持ってきて、こう手際良くテキパキと」
流石は秀吉だな
「ま、見かけはそれなりのものになったがの。その分、クロスを捲るとこの通りじゃ」
クロスの下には薄汚れたミカン箱があった
「これを見られたら店の評判はがた落ちね」
「きっと大丈夫だよ。こんなところまで見ないだろうし、見たとしてもその人の胸の内にしまっておいてもらえるさ」
「そうですね。わざわざクロスをはがしてアピールするような人は来ませんよ。きっと」
つか来たら営業妨害としか思えん
「室内の装飾も綺麗だし、これならうまくいくよね」
「・・・・・・飲茶も完璧」
「お、厨房の準備は終わったかムッツリーニ」
「あれ？厨房の責任者って恭介じゃなかったっけ」
「面倒だったからムッツリーニに全部任せてサボって腕がちぎれそうなほど痛いっ！」
美波に関節を極められた
（あんたねぇ！これには瑞希の転校がかかってんのよ。わかってるの！）
（わ、わかった。俺が悪かったからはなせ。腕が折れるぅぅぅーー！）
「次さぼったらその腕へし折るわよ」

「りょ、了解」
サボるのはもうやめておこう。・・・殺されるっ！
「・・・・・・味見用」
そう言ってムッツリーニが差し出したのは、木のお盆。上には陶器のティーセットと胡麻団子が載っていた
「わぁ・・・。美味しそう・・・」
「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」
「・・・・・・（コクリ）」
「では、遠慮なくいただこうかの」
姫路、美波、秀吉の三人が胡麻団子に手を伸ばし勢いよく頬張る
「お、美味しいです！」
「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感もいいし！」
「甘すぎないところもいいのう」
「それじゃ、僕も貰おうかな」
「・・・・・・（コクコク）」
ムッツリーニが残った一つを明久に渡す。・・・なぜか嫌な予感がする
「ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとっても・・・んゴパっ」
明久に口からあり得ない音が出た
「あ、明久！」
「あ、それはさっき姫路が作ったものじゃな」
姫路かっ！誰だ姫路を厨房に立たせたのは
「・・・・・・！！（グイグイ）」
「む、ムッツリーニ！どうしてそんなに怯えた様子で胡麻団子を僕の口に押し込もうとするの！？無理だよ！食べられないよ！」
団子の残り半分を明久の口に押し込もうとするムッツリーニとそれに必死で抵抗する明久。この二人の気持ちはよくわかる。あれは最早食べ物じゃない・・・生物兵器だ
「うーっす。戻ってきたぞ！」

と、そんなところに生贄、もとい雄二が戻ってきた
「あ、雄二お帰り」
「ん？なんだ美味そうじゃない。どれどれ？」
そして、躊躇いなく明久の食べかけの生物兵器を口に運ぶ
「・・・大した男じゃ」
「雄二。君は今、最高に輝いてるよ」
「ああ、迷わず逝け」
「？お前らが何を言っているのか分からんが・・・。ふむふむ。表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとっても・・・んゴパっ」
既視感（デジャブ）だ
「あー、雄二。とっても美味しかったよね？」
「ふっ。なんの問題もない」
おー、姫路の料理を食べてまだこんなことがいえるとは流石雄二
「あの川を渡ればいいんだろう？」
「戻ってこぉーいっ！」
その川を渡ったら死ぬぞ！
「ゆ、雄二！その川はだめだ！渡ったら戻れなくなっちゃう！」
俺と明久は必死に心臓マッサージをする
「六万だと？バカを言え。普通渡し賃は六問と相場が決まって・・・はっ！？」
ふう、蘇生成功。今回はヤバかったな
「雄二、足が攣ったんだよね？」
雄二が余計なことを言わないうちに明久がたたみかける
「足が攣った？バカを言うな！あれは明らかにあの団子の・・・」
（・・・もう一つ食わせるぞ）
「足が攣ったんだ。運動不足だからな」
（・・・明久、いつかキサマを殺す）
（・・・上等だ。やられる前にやってやる）
笑顔を張り付けての小声のやりとり。・・・やっぱこいつらバカだ

「はぁ。で、お前は何をしてたんだ？」
「ああ、ちょっと話し合いにな」
例の試験科目の指定か・・・
「そういえばお前らそろそろ召喚大会の一回戦じゃないか？」
「そうだな。それじゃそろそろ行くか」
「そうだね」
「あれ？吉井と坂本も召喚大会に出るの？」
美波が聞いてくる。そう言えばこいつらには召喚大会に出ることも言ってなかったな。まあ言うと面倒なだけだからな
「え？あ、うん。色々あってね」
「あの、ひょっとして賞品が目的なんですか？」
「う～ん。一応そういうことになるかな」
「だ、誰といくつもりなんですか？」
「え？だ、誰と言われても」
姫路が行っているのはペアチケットのことだろう
「明久は俺といくつもりなんだ」
明久が答えに詰まっていると、すかさず雄二がフォローに入った。
「え？坂本君とペアチケットで、『幸せになりに』行くんですか・・・？」
・・・ただ状況を悪化させただけにも見えるが
「俺は何度も断っているんだがな」
こいつは明久を同性愛者にしたいのか？
「吉井君。男の子なんですから、出来れば女の子に興味を持ったほうが・・・」
「それができれば明久だって苦労はしないさ」
「雄二、もっともらしくそんなこと言わないで！全然フォローになってないから！」
「っと、そろそろ時間だ。行くぞ明久」
「・・・くっ。と、とにかく誤解だからね！」
まるで小悪党の捨て台詞のように弁明し、明久と雄二は教室を出て

行った

★

明久と雄二が出て行ってからしばらくして面倒な連中がやってきた
「マジできったねえ机だな！これで食いもの扱っていいのかよ！」
坊主頭の奴とソフトモヒカンの二人組がクロスをはがして文句を言っている
『うわ・・・確かにひどいな』
『クロスでごまかしてたみたいね』
『学園祭といっても、一応食べ物のお店なのに・・・』
他の客からも次々と不満が上がる
（早いとこ対処しないとまずいな）
「秀吉、一つ頼めるか？」
「？なんじゃ？」
「用意できるだけでいい。テーブルを持ってきてほしい」
「しかし・・・あっても二つ程度じゃぞ？」
「ああ、それでいい」
「了解じゃ、すぐに戻る」
そう言って、教室内のクラスメイト数名に声をかけて秀吉は足早に去って行った
「まったく、責任者はいないのか！このクラスの代表腕の関節がぁぁーーーー！」
「代表は現在不在ですので、不満があれば私に申し上げてください」
「不満も何も、今連れが腕の関節を外されたんだが・・・」
「それは私のモットーの『腕の関節を外すから始まる交渉術』です」
「ふ、ふざけんなよこの野郎・・・！何が交渉術足の関節がぁぁーーー！」
「そして『足の関節を外す交渉術』でございます。最後には『背負（せおい）落（とし）で締める交渉術』が待っておりますので」

「わ、わかった！こちらからはこの夏川を交渉に出そう！俺は何もしないから交渉は不要だぞ！」
「ちょ、ちょっと待てや常村！お前、俺を売ろうというのか！？」
常村と夏川か、よし名前と顔は覚えたな
「それで常夏コンビ。まだ交渉を続けるか？」
「い、いや、もう十分だ。退散させてもらう」
モヒカン頭のほうが撤退を選んだ。賢明な判断だな
「そうか。それなら・・・」
「おいっ！俺はもう何もしてないよな！？どうしてそんな大技をげぶるぁっ！」
「・・・これで交渉は終了だ」
「お、覚えてろよっ！」
そう捨て台詞を残して常夏コンビは去って行った
『流石にこれじゃ、食ってく気しないな』
『折角美味しそうだったんだけどねぇ』
『食ったら腹壊しそうだからなぁ』
『店、変えるか』
『そうしようか』
ちっ、秀吉はまだか・・・
「待たせたの」
ぎりぎり間に合ったな
「失礼しました。こちらの手違いでテーブルの到着が遅れていたので、暫定的にこのようなものを使ってしまいました。たった今本物のテーブルが届きましたのでご安心ください。他のテーブルも届き次第順次取り換えて行きますので、ご利用中のお客様はひとまずこちらのテーブルにお移りの上、おくつろぎください」
これでほとまずは大丈夫だな
「ん？なんだこの騒ぎは？」
「ああ、雄二。やっと帰ってきたか」
「あれ？テーブルを入れ替えてるの？」

美波たちも戻ってきたようだ
「ああ、実は・・・」
・・・・・・事情説明中・・・・・・・
「・・・という訳だ」
「なるほどな」
「あの、持ってくるテーブルは足りるんですか？」
「そうだね。演劇部のテーブルはそんなに数がないだろうし」
「それなら考えてある。明久、お前ら二回戦まではどれくらい時間がある？」
「え？えーっと、小一時間ってところかな」
「そうか、あまり時間がないな。それじゃさっさと行くぞ。明久、雄二ついてきてくれ」
「ウチらは手伝わなくていいの？」
「ああ、お前らはウェイトレスをしていてくれ。落ちた評判を取り戻すために、笑顔で愛想よく、な」
「はいっ！頑張りますっ！」
「んじゃ、行くぞ」
「あ、うん。でもどこに行くのさ？」
明久が呼びとめてくる。確かに、まだ話してなかったな
「テーブル調達だよ、多少強引だけどな」
そう言って俺たちは教室を後にした

（それにしても、営業妨害・・・か）

七限目　清涼祭始まる（後書き）

今回は当行が少し遅くなりました

っていうか足の関節外したのにモヒカンが走って逃げられるわけありませんね（笑）

八限目　暗躍

問題　ＰＫＯとは何か答えなさい

姫路瑞希、風島恭介の答え

Ｐｅａｃｅ－Ｋｅｅｐｉｎｇ　ｏｐｅｒａｔｉｏｎｓ（平和維持活動）の略

国連の勧告のもとに、加盟各国によって行われる平和維持活動のこと

教師のコメント

そうですね。豆知識ですがＵｎｉｔｅｄ　Ｎａｔｉｏｎｓ　Ｐｅａｃｅｋｅｅｐｉｎｇ　Ｏｐｅｒａｔｉｏｎｓとも呼ばれたりします。余裕があれば覚えておくといいでしょう

土屋康太の答え

Ｐａｎｔｓ　Ｋｏｓｈｉ－ｔｓｕｋｉ　Ｏｐｐａｉの略

世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体のこと

教師のコメント

君は世界の平和をなんだと思っているのですか

吉井明久の答え

パウエル・金本・岡田の略

教師のコメント

それはセ界の平和を守る人たちです

「吉井君に坂本君に風島君！今日という今日は許しませんよ！」
「明久、雄二、走れ！捕まったら生活指導室行きだぞ」
「鉄人の根城！？冗談じゃない！」
「鉄人の地獄の補修なんざくらってたまるか！」
俺たちは現在布施先生に追われながら廊下を走っている。何故追われてるかって？そんなの・・・
「折角パクったテーブルだ！落として壊すなよ！」
「わかってるよ！」
・・・応接室からテーブルを盗んできたからに決まってるじゃないか！
「それにしても、どうして、テーブルを背負って、そんなに早く、走れるのですか・・・」
慣れてるからです！
「一旦喫茶店に使っちまえばこっちのもんだ！一般客が使用中のテーブルを回収するなんて教師でもできるわけねぇからな」
「こうなったら、西村先生に応援を・・・」
布施先生が携帯を取り出す。鉄人！？冗談じゃない！
「明久」
「あいよっ！」
走りながら上靴を片方脱ぎ、俺に向かって蹴りあげる
「シュートっ！」
「うわっ！」
見事布施先生の手元に命中。携帯電話は宙を舞って廊下に転がった
「それでは御機嫌よう、先生方」
これで問題ないだろう
「ああっ、僕の上靴」
明久がなんか言っているが気にしない。先生たちの姿が見えなくなった所でテーブルをそこら辺に放置し、秀吉に場所をメールで伝える

「よし。次は職員室そばの休憩室からパクるぞ。それが終わったらお前らは二回戦にいっていいぞ」
「はぁ・・・。僕らいつか停学になる気がするよ・・・」
「まったくだ・・・」
ハッハッハッそんなの今更じゃないか。ともかくこれでテーブルの確保は完了した。悪評のもとは消えたんだし喫茶店も問題ないだろ

★

テーブルの確保も完了し、明久たちは二回戦に向かい、俺は厨房に戻った
「雄二たちは二回戦勝てたかのう」
「問題ないだろ。確か雄二たちの二回戦の相手は根本と小山だったはずだからな」
「相手は仮にもBクラスとCクラスの代表じゃぞ。何故そう言い切れるのじゃ？」
「そりゃあお前、雄二が会場に向かう前に例の写真集を持っていくのを見ちまったからだよ」
「ああ・・・そういうことじゃったか」
「ああ」
例の写真集というのはもちろんBクラス戦が終わった後に撮影された根本の？女装写真集のことだ。雄二のことだから恐らくその写真集を小山に見せる気だろう。自業自得とは言え憐れみすら覚える
「それにしても客がこねぇな」
「そうじゃのう」
あれ以降妙な客は来ていない。それなのにこの状況というのはあの連中外で何かやってやがるな
「ただいまー・・・って、あんまりお客さんがいないなぁ」
「お、戻ってきたか明久」
「無事勝ってきたよ」

当然だろう。何せあの写真集があるのだから
「それはなによりじゃ。ところで、雄二の姿が見えんが？」
「うん。トイレに寄ってくるってさ。それより恭介、これはどういうこと？お客さんがいないじゃないか」
「まぁな。あれ以降妙な客は来てねぇし大方さっきの連中が外で何かしてるんだろう」
「そこまでするかなぁ」
明久の言うとおり学園祭の出し物の営業妨害としては行き過ぎている。
（一度ババァに聞きに行く必要がありそうだな）
そう考えていると
『お兄さん、すいませんです』
『いや。気にするな、チビッ子』
『チビッ子じゃなくて葉月です』
雄二と小さな女の子の声が聞こえてきた・・・ッて葉月？
『んで、探してるのはどんな奴だ？』
ガラッとドアが開き雄二の姿が見えた
『お、坂本。妹か？』
『可愛い子だなぁ～。五年後にお兄さんと付き合わない？』
『俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなぁ』
『あ、あの、葉月はお兄ちゃんを探しているんです』
『お兄ちゃん？名前はなんて言うんだ？』
『恭介お兄ちゃんです』
『何？恭介？』
やっぱ葉月か・・・
「おい、葉月何やってんだ」
「あ、恭介お兄ちゃんだ！」
葉月が駆けてきて、抱きつかれた
「え？恭介に妹なんていたの！？」
明久が驚いた顔で聞いてくる

「ああ違う違う。こいつは・・・」
「あれ？葉月じゃない」
俺の言葉は美波に遮られた
「あ、お姉ちゃん遊びに来たよ」
「あれ？島田さんの知り合い？ハッ！まさか二人のこど「殺すぞ？」すいませんでした。調子に乗りました」
「はぁ、まったく。葉月は美波の妹だよ」
「そっか島田さんの妹だったんだね。よろしくね葉月ちゃん僕は吉井明久ってゆうんだよ」
「はいです！バカなお兄ちゃん！」
「違うよ葉月ちゃん！僕の名前は吉井明久であって決してバカなお兄ちゃんじゃないからね！っていうかそんなことだれにきいたのさ！」
「恭介お兄ちゃんがよく俺には吉井明久っていうすっごく馬鹿な友達がいるってよく聞いてましたから」
「恭介！小学生になんてことを言ってるのさ！」
明久がすごい勢いで迫ってくる
「俺はただ事実をありのままに伝えただけだが？」
「それは僕が馬鹿だって言っているの！？」
「「「「え！？お前（お主）（あんた）自分が馬鹿じゃないとでも思ってるのか（おるのか）（るの）？」
「皆なんて嫌いだっ！」
「そんで、この客の少なさはどういうことだ？」
いつものやりとりが一通り済んだところで、雄二が客が少ないことについて聞いてくる。そう言えばそっちを忘れてたな
「そういえば葉月、ここに来る途中で色々な話を聞いたよ？」
「どんな話だ？」
「えっとね、中華喫茶は汚いから行かないほうがいい、って」
はぁ、やっぱりそういうことか
「さっきのヤローどもだな」

「さっきのって、常夏コンビのこと？まさか、そこまで暇じゃないでしょ」
「それは楽観視しすぎだな。まあどっちにしろ一度様子を見に行く必要があるのは間違いないな」
「そうだね。少なくとも、噂がどこから流れてどこまで広がっているのかを確認しないと」
葉月が聞いてるぐらいだからすでに相当広がっていると考えるべきだろうな
「お兄ちゃん、葉月と一緒に遊びにいこっ！」
ギュッと葉月が手を握ってくる。まいったな。いつもなら普通に遊んでやるんだが
「悪いな、葉月。今日はちょっとやることがあるからあんまり遊んでやれねえんだ」
「む～。せっかく会いに来たのに～」
葉月が頬をふくらませてしまう。どうしたものか
「それなら、そのチビッ子も連れて行けばいい。飲食店をやっているほかのクラスを偵察する必要があるからな」
「そうか、悪いな。そんじゃ、一緒に飯でも食いに行くか」
「うんっ」
膨れ顔が一転して満面の笑顔に。本当に感情の起伏の激しい奴だ
「じゃあ葉月、お姉ちゃんも一緒に行くね」
「ん？美波も来るのか？」
「うん。どうせだからね」
「ふむ。ならば姫路と雄二も一緒に行くと良いじゃろ。召喚大会もあるじゃろうし、早めに昼を済ませてくると良い」
「そうか。悪いな、秀吉」
「いいんですか？ありがとうございます。木下君」
これで雄二と姫路も合わせて六人か。結構多いな
「・・・・・・」
ふと視線を感じてそちらを見ると明久が俺と美波、それに葉月のほ

うを見ていた
「ん？どうした明久。こっちをずっと見て」
「いや、何だかこうやってみると恭介と美波って子連れ夫婦みた痛たたたたたたたっ！か、関節がぁぁぁぁーーーーーーーーっ！」
「何言ってんだこのボケがぁぁぁーーーーー！」
「ご、ごめん！僕が悪かったから許して。ホントに死んじゃうぅぅぅーーーーー！」
「さっさと死ねぇぇーーー！」
「ほら、その辺にしておけ。時間がなくなるぞ」
雄二が止めに入ってきた。ちっ。しょうがねぇか
「今回だけだぞ」
「う、うん」
美波のほうを見てみると
「／／／／／／」
顔を真っ赤にしてうつむいていた。その仕草が異様に可愛らしくて俺は不覚にもドキッとしてしまった
「それでチビッ子、さっきの話はどの辺で聞いたのか教えてくれるか？」
「えっとですね・・・短いスカートをはいた綺麗なお姉さんがいっぱいいるお店・・・」
「なんだって！？雄二、それはすぐに向かわないと！」
「そうだな明久、我がクラスの成功のために、（低いアングルから）綿密に調査しないとな！」
そう言って全力ダッシュ。欲望丸出しだな
「吉井君、酷いです・・・」
姫路のそんな言葉も無視して走り去っていく
「ねえ恭介」
「ん？なんだ？」
「あんたは行かないの？」
「俺をあの馬鹿どもと一緒にするな。んなもん興味ねえよ」

（それはそれで困るんだけど）
美波が小声で何かつぶやく
「何か言ったか？」
「はぁ、なんでもない・・・」
そう言って歩いて行った。なんなんだ？

★

「明久、ここはやめよう」
「ここまで来て何言ってるのさ！早く中に入るよ！」
「頼む！ここだけは、Ａクラスだけは勘弁してくれ！」
雄二にしては珍しく本気で嫌がっている。ああ、そうか。このクラスには霧島がいるんだったな。雄二と霧島はＡクラスとの試召戦争以降付き合っている。何故そうなったのかというと、それはＡクラスとの試召戦争後・・・

「三対二でＡクラスの勝利です」
視聴覚室になだれ込んだ俺たちに対する高橋先生の締めのセリフ
「・・・雄二、私の勝ち」
床に膝をつく雄二に霧島が歩み寄る
「・・・殺せ」
「良い覚悟だ、殺してやる！歯をくいしばれ！」
「吉井君、落ち着いてください！」
姫路が明久に後ろから抱きつく
「だいたい、５３点って何だよ！０点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと・・・」
「いかにも俺が実力だ」

「この阿呆がぁーっ！」
「落ち着け明久。お前だったら３０点も取れないだろ」
「それは否定しない！」
「それなら坂本君を責めちゃだめです！」
「くっ！なぜ止めるんだ姫路さんに恭介！この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに！」
「何故止めるかって？それは・・・こいつを殺すのは俺だからだぁー！」
ゴスッ
「グハッ」
「あんたも何バカなこと言ってるのよ！」
「くっ！止めるな美波！こいつには生皮をはがした後に心臓をえぐりだすという体罰が必要なんだ！」
「「それは体罰じゃなくて処刑よ（です）！」」
「大体あんたも坂本に任せたんだからグダグダいわないの！」
ぐっ！反論できない
「・・・でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断していなければ負けてた」
「言い訳はしねぇ」
図星かよ
「・・・ところで、約束」
ああ、そういえばあったなそんなの
「わかっている。何でもいえ」
「・・・それじゃ・・・」
姫路に一度視線を送り、再び雄二に戻す
そして、小さく息を吸って
「・・・雄二、私と付き合って」
言い放った
やっぱりな。そういうことか
明久たちはおどろいて呆然としている。

霧島翔子は異性に興味を持っておらず、女子が好きという噂がある。しかし実際はただ一人の男子のことを思っていたため他の男子には興味がなかったというだけだったということだ。姫路を見ていたのはただ雄二の近くにいる異性が気になっただけだろう。
（というか普通はこう考えると思うのだが、何故真っ先に同性が好きという考えに至るんだこの学校の連中は）
「お前、まだ諦めてなかったのか」
「・・・私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」
「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合う気話ないのか？」
「・・・私には雄二しかいない。他の人なんて、興味ない」
「拒否権は？」
「・・・ない。約束だから。これからデートに行く」
「ぐぁっ！放せ！やっぱこの約束はなかったことに・・・」

ぐいっ　つかつかつか

霧島は雄二の首根っこをつかみ、教室を出て行った

・・・というやりとりがあったのだ
それ以来雄二はずっとこの調子だ
「そっか。ここって坂本の大好きな霧島さんのいるクラスだもんね」
「坂本君、女の子から逃げ回るなんてダメですよ？」
「ほら、グダグダ言ってないでさっさと入るぞ」
「ま、待ってくれ！」
嫌がる雄二を無視して俺は教室に入った
「・・・おかえりなさいませ、ご主人様」

出迎えてくれたのはメイド服姿の霧島だった
「わぁ、綺麗・・・」
姫路が簡単の声を漏らす。うん、確かに綺麗だな。雄二にはもったいないくらいだ
「それじゃ、僕らも」
「はい、失礼します」
「お邪魔しまーす」
「お姉さん、きれ～」
明久たちも中に入ってくる
「・・・おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様」
「・・・チッ」
雄二も最後に渋々入ってくる
「・・・おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」
大胆だなおいっ！
「霧島さん、大胆です・・・」
「ウチも見習わないとね」
「あのお姉さん、寝ないで一緒に遊ぶのかな？」
三者三様のリアクション。うん、葉月はまだ分からなくていいです
「お席にご案内いたします」
霧島が歩きだしたので俺たちもそれについていく
「ね、お兄ちゃん。凄いお客さんの数だね～」
「んー確かにそうだな」
葉月の言うとおりAクラスの教室は客でいっぱいだった。うちのクラスとは大違いだ
「・・・では、メニューをどうぞ」
「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」
「あ、私もそれが良いです」
「葉月もー！」
女子は三人ともシフォンケーキ
「僕は『水』で。付け合わせに塩があるとうれしい」

「俺は『紅茶』で」
「んじゃ、俺は・・・」
「・・・ご注文を繰り返します」
雄二の言葉を遮る霧島
「・・・『ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『水』を一つ、『紅茶』を一つ、『メイドとの婚姻届』が一つ。以上でよろしいですか？」
「ああ、それでいい」
「全然よろしくねぇぞッ！つーか恭介も当たり前のようにスルーしてんじゃねえ！」
雄二が動揺した声を上げる。ふん、日ごろのお返しだ
「・・・では食器をご用意いたします」
女子のところにはフォークが、明久の前には塩が（っていうか本当に塩用意したんだな）、雄二の前には朱肉と実印が用意された
「しょ、翔子！これ本当にうちの実印だぞ！どうやって手に入れたんだ！？」
「・・・では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ちください」
霧島はお時儀をしてキッチンへ歩いて行った
「・・・明久。俺は召喚大会に優勝しなければならないんだ・・・！」
「あ、うん。それは勿論僕もそうだけど」
並々ならない雰囲気で言う雄二。素直じゃない奴だ
「それで、葉月。ここでいいのか？」
「うんっ。ここで嫌な感じのお兄さん二人がおっきな声でお話ししてたの！」
嫌な感じのお兄さん二人・・・間違いないな
『おかえりなさいませ、ご主人様』
『おう。二人だ。中央付近の席は空いてるか？』
と、話している途中聞き覚えのある下品な声が聞こえてきた
「あ、あの人たちだよ。さっき大きな声で『中華喫茶は汚い』って

言ってたの」
やっぱりあの屑どもか
『それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな！』
『そうだな。さっき言った二―Ｆの中華喫茶は酷かったな』
『テーブルが腐った箱だったし、虫も湧いてたもんな』
人の多い喫茶店の中央でわざわざ大きな声で叫びあう。確かに中華喫茶の悪評を広めるには最高の方法だな。それにしても馬鹿な連中だ。あんないかにもわざとらしくあんなことを叫ぶとは、奴らは自分たちの器の小ささを晒しているようなものだ。明久が連中を殴り倒すために席を立つ
「まて、明久」
それを雄二が止める
「雄二、どうして止めるのさ！あの連中を早く止めないと！」
「馬鹿か！こんなところで殴ったりしたら余計に悪評が広まるだろうが」
「けど、このまま指をくわえてみてるなんて・・・」
「頭を使えってことだ。だろ？雄二」
「ああ。おーい、翔子」
「・・・何」
うおっ！呼ばれた瞬間にあらわれたぞ。待機でもしてたのか？
「あの連中がここに来たのは初めてか？」
「・・・さっき出て行ってまた入ってきた。話の内容もさっきと変らない。ずっと同じようなことを言っている」
霧島が少し顔をゆがめる。霧島にとっても愉快な客ではないのだろう
「そうか・・・よし、メイド服を貸してくれ」
「・・・分かった」
迷いなく返事をすると霧島は・・・その場でメイド服を脱ぎ始めた
「って何やってんだお前はっ！」
「き、霧島さん！こんなところで脱ぎ始めちゃだめです！」
「そうよ！ここにはけだものが沢山いるのよ！？」

「わぁ～。お姉さん、胸おっきいです～」
「・・・雄二がほしいって言ったから」
止められた霧島は不思議そうな顔をしている。こいつは雄二に言われればなんでもするのか？
「お、俺がいつお前の来ているメイド服がほしいといった！？予備の奴があれば貸してくれって意味だ」
「・・・今、持ってくる」
霧島が服を着直して去っていく
『あの店、出している食い物もやばいんじゃないか？』
『言えてるな。食中毒でも起こさなければいいけどな』
『二―Ｆにはきおつけろってことだよな！』
わざとらしい会話。底の浅い連中だ
「雄二！なんでもいいから早く連中を！」
「いいからもう少し待ってろ。ところで姫路、島田。身だしなみ用のものを持っていたら貸してくれないか？」
「？はぁ・・・別にいいですけど」
そう言って姫路はポーチを取り出し雄二に渡した
「悪いな。必ず返す」
「・・・雄二、これ」
霧島がメイド服を持って戻ってきた
「おう。すまないな」
「・・・貸し一つ」
「だ、そうだ。恭介」
「わかった。じゃあ霧島、今度一日雄二を好きにしていいぞ」
「・・・ありがとう。風島はいい人」
「ちょっと待て！どうして俺が！」
「俺に任せたのはお前だろ。自業自得だ」
「ぐっ」
「で、これをどうするの」
「・・・着るんだ」

「お前がな」
「ええ！なんでぼくが！？それなら恭介がきればいいじゃないか！」
「俺は面が割れてるだろうが」
「じゃ、じゃあ雄二が・・・」
「ああもうメンドくさい。どうせ最終的にはお前がきることになるんだからさっさとしろ！」
「うぅ。何で僕が」
「大丈夫ですよ明久君」
渋っている明久に姫路がフォローを入れる。助かるぜ
「きっと似合いますから」
そうじゃないだろ！なんか最近姫路も壊れてきたなと思う今日この頃

★

「こ、この上ない屈辱だ」
「明久。似合ってるぞ（笑）」
「笑うな！」
「ハハっ、まあこれであとはお前らだけで大丈夫だな」
「あれ？恭介はどこか行くの？」
「ああ、ちょっと用事がな」
（あの屑どもの妨害、学園祭の出し物の妨害にしては行き過ぎている。一度学園長に確認する必要がある）
「あっ、恭介」
俺が教室を出ようとしたら美波に呼び止められた
「なんだ？」
「あ、あのさ、その、この後一緒に見て回らない？次の試合まではまだ時間があるし」
少し顔を赤く染めて上目遣いで聞いてくる。こ、これ反則だろ
「あ、ああ。別にいいけど」
「そ、それじゃあ待ってるね」

「わ、分かった」
もやもやしたものが胸に引っ掛かっていたがあまり時間もなかったので俺はそのまま教室を後にした

九限目　真相

問題　以下の文章の（　）に入る正しい物質を答えなさい
ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと（　）である

姫路瑞希、風島恭介の答え
水酸化カルシウム

教師のコメント
正解です。アンモニアを生成するハーバー法は興行的にも重要な内容ですので、確実に覚えておいてください

土屋康太の答え
塩化吸収剤

教師のコメント
勝手に便利な物質を作らないように

吉井明久の答え
アンモニア

教師のコメント
それは反則です

「どういうことか説明してもらおうか」
「何のことだい？」
俺は今学園長室に来ている。もちろん妨害のことについて聞くためだ
「しらばっくれるな。俺たちのクラスへの執拗な妨害、これについてあんたは何か知っているはずだ。白銀の腕輪関連の何かをな」
「はぁ、降参だよ。それで、あんたはどう考えてるんだい？」
「大方あんたの失脚を狙った他校の経営者、そしてその内通者ってところだろ」
「流石、といったところかねぇ」
「いや、最初に気付けなかった時点でだめだ」
本当なら一番最初、明久たちに白銀の腕輪をババァが獲得させようとした時点で内通者の存在は十分に気付くことができたはずだ。それを見逃してしまったのは俺のミスだ
「それで、内通者の目星はついてるのか？」
「身内の恥を晒すみたいだからできれば言いたくなかったんだがねぇ、ばれちまってるんじゃしょうがない。恐らくあんたらのクラスへの妨害は教頭の竹原によるものだね。近隣の私立校に出入りしていたなんて話も聞くし、まず間違いないさね」
「はぁ、分かってはいたが相当まずい状況みたいだな」
「ああ。この話には文月学園の存続がかかってるからねぇ」
試召戦争と試験召喚システムは、その特異な教育方針と制度で存在自体の是非が問われている。そんな状態で暴走なんて起きれば、最悪学校そのものが取り壊しになるなんてことも考えられる
「確かこのまま順調に勝ち進むと明久たちの決勝の相手は」
「そう。今あんたが言った常夏コンビになるねぇ」
つまり優勝者に事情を話して回収なんてことはできないわけだ。奴らは教頭側の人間。嬉々として観客の前で暴走を起こすだろう
「悪いが、あの馬鹿たちには何としてでも優勝してもらうしかないんだよ」
俺ははぁ、と一つため息をだす

「分かった。そういうことならあいつらが優勝できるように俺も協力しよう。妨害のほうもあいつらが集中力を欠くことの内容に出来るだけこっちで処理しておく」
「悪いね。任せたよ」
俺はああ、と一言だけ返して学園長室を後にした

★

「にしても人多いな」
「そうねぇ」
現在俺は約束通り美波と二人で学園祭を回っていた
「あ、恭介。お化け屋敷があるわよ」
「お前お化け苦手だろ？」
「うっ。べ、別に苦手ってわけじゃ・・・」
「意地を張るのはやめとけ。どんだけ長い付き合いだと思ってるんだ。お前がお化けが苦手なことぐらい知ってるよ」
（それならうちの気持ちに気付いてくれてもいいと思うんだけど）
「？何か言ったか？」
「なんでもない」
（そんな不機嫌そうな顔をして言われても説得力がないんだが）
追求したら逆に怒らせそうなのでやめておく
「つーかお前、何でお化け屋敷に入りたいんだよ？」
「ふぇ」
怒った顔から一転して今度はいきなり顔を赤くしてうつむいてしまった。なんか可愛いな・・・
「そ、それはその・・・（お化け屋敷なら遠慮なく恭介に抱きつけるからなんて言えないし）」
何か言った気がしたが声が小さくて聞き取れなかった
「まあお前が入りたいって言うならいいけどな」
「ホント！」

顔をあげて覗き込んでくるような感じで聞いてくる。か、顔が近い・・・。
「あ、ああ」
「じゃ、ならぼ！」
やたらとうれしそうに言うので俺は断ることができず美波と一緒にお化け屋敷の列に並んだ

・・・待つこと十分・・・

順番が回ってきて俺と美波はお化け屋敷の中に入って行った
「く、暗いわね」
「まあ、お化け屋敷だからな」
明るいお化け屋敷なんてないだろう
「で、大丈夫なのか」
「う、うん。大丈夫・・・（恭介とくっついていられるし）」
美波に大丈夫かと聞くが今のところ俺のほうが大丈夫ではなかった。なぜならお化け屋敷に入ってからずっと美波に抱きつかれているからだ。おかげで俺は心臓の鼓動が普段の倍近く早くなっていた
「そ、それにしても結構こってるな」
「そ、そうね」
駄目だ！会話が続かない。な、何かこれだとお互い意識してるみたいじゃないか
「ね、ねえ恭介」
「な、なんだ？」
「その、恭介は私のことどう思ってるの？」
質問の意味がわからなかった。
「えっと、そりゃ大切な仲間で幼馴染だと」
「そ、そういうことを聞いてるんじゃないの！」
急に美波が迫ってきた。その表情はやけに必死に見える
「つ、つまり私のことを・・・」

必死にそのあとの言葉を紡ごうとする美波
「・・・お、お化け（パタリ）」
「お、おい大丈夫か美波」
（駄目だ完全に気絶してる）
後ろを振り向くとそこには血まみれの男が立っていた。ああ・・・これを見て気絶したのか。やっぱりお化け屋敷はこいつにはハードルが高すぎたな
「はぁ、しょうがないか」
俺は気絶した美波を背負ってお化け屋敷を出てそのまま教室に戻った
（それにしても）
あのとき美波はなんと言おうとしたのだろうか。それだけがどうしても気になった

★

「で、三回戦は不戦勝だったのか？」
「うん。相手が食中毒で棄権したんだ」
明久たちはあの後結局常夏コンビを逃がしてしまい、そのあと慌てて会場に向かったら相手が棄権という拍子抜けの結果だったらしい。なんでも食中毒だったらしい。・・・うちの店で外れを引いた客ではないと信じよう
「ならば、済まぬがこっちの立て直しに協力してくれんか？」
秀吉が申し訳なさそうに表情を曇らせる。別に秀吉が悪いわけでわないのだが。むしろ最初に気付けなかった俺の責任だろう
「そうだな。一度失った客を取り戻すためにも、何かインパクトのあることをやる必要がありそうだな」
「問題は何をやるか、だな・・・」
「雄二、何かアイデアはある？」
「任せておけ。中華とこれでは安直過ぎる発想だが、効果は絶大なはずだ」

そう言って雄二がとりだしたのは、刺繍も見事な水色と白のチャイナドレスだ。
「確かにこれならインパクトがあるな」
「ああ。これを・・・明久が着る」
「ちょっ・・・！お願い、許して！メイド服の次にメイド服まで着たら、きっと僕は本物だってみんなに認識されちゃう！」
とっくの昔に認識されてるだろ、という言葉は言ったらめんどそうなので呑み込んだ
「冗談だ。これを秀吉と姫路と島田に着てもらう」
「あ、なんだ。よかったー」
「わしが着るのは冗談ではないのかのぅ・・・？」
諦めろ秀吉こいつらはお前を完全に女として認識してるからな
「たっだいま～！って、なんだ。吉井ってばメイド服脱いじゃったんだ」
「あ・・・残念です。可愛かったのに・・・」
「お兄ちゃん。葉月もう一回見たいな～」
「あはは。残念ながら、ただで人のコスプレを見れるほど世の中甘くないよ？」
「そういうことだ。姫路に島田、クラスの売り上げのために協力してもらうぞ」
獲物を逃がさないように、チャイナを片手に退路を断つ。まあ少なくとも美波は逃げようとするだろうからな
「な、何だか二人とも、目が怖いですよ・・・？」
「凄く邪悪な気配を感じるんだけど・・・」
若干引き気味な二人。確かに俺の目から見ても今の明久と雄二は犯罪者にしか見えない
「やれ、明久！」
「オーケー！へっへっへっ、おとなしくこのチャイナ服に着替え痛あっ！マジすんませんした！自分チョーシくれてましたっ！」
「弱いな、お前・・・」

ホントにな
「どうしてまた、急にそんなこと言い出すのよ？前に須川はチャイナドレスを着るようなことはない、」って言ってたと思うけど」
やはりというか、美波は渋い顔をする
「店の宣伝のためと、明久の趣味だ。明久はチャイナドレスが好きだよな？」
「大好・・・愛してる」
言いなおしてる意味ねえぞ
「・・・お前は本当に嘘をつけない奴だな」
「しょ、しょうがないですね！お店のためですしね！」
「うーん」
姫路は服を取ったが美波はやはり渋っている。やっぱ無理かと思った時美波がチラッとこちらを見た
「あ、あのさ。恭介はウチのチャイナドレス姿みたい？」
「メチャクチャみたい！（べ、別に興味ねえよ）」
「本音と建前が逆になってるぞ」
はっ！いつの間に
「し、仕方ないわね。店の売り上げのために、仕方なく着てあげるわ」
仕方なくの部分をやたらと強調していたのが気になったがとりあえず着てはくれるらしい
「お兄ちゃん、葉月の分は？」
「ん？葉月も手伝ってくれるのか？」
「お手伝い・・・？あ、うん！手伝うから、あの服葉月にもちょうだい！」
（絶対に着たかっただけだな）
と思ったが手伝ってくれるらしいので良しとすることにした
「でも葉月ちゃんの分はないよね」
「それなら問題ない。あれを見ろ」
「・・・・・・！！（チクチクチクチク）」

「ム、ムッツリーニ！どうしてそんなすごい勢いで裁縫を！？っていうかさっきまでいなかったよね！？」
「・・・・・・俺の嗅覚をなめるな」
すごくかっこいい顔で凄くかっこ悪いことを言う
「それじゃ、三回戦が終わったら着替えますね」
「いや、今着替えてもらいたい」
「「え？」」
二人の声がハモる
「宣伝のためだ。そのまま召喚大会に出てくれ」
「こ、これを着て出場しろって言うの・・・？」
「流石に恥ずかしいです・・・」
二人ともチャイナでレスを持って困った顔をする。メディアを含めた大勢の人の前にあの恰好で行くのにはやはり抵抗があるのだろう
「二人とも、お願いだ」
そう言って頭を下げる明久。そうか・・・
「明久・・・お前は本当に・・・チャイナが好きなんだな・・・」
まさか頭まで下げるとは
「もしかして吉井君、私の事情を知って・・・」
あっ、そっちか
「仕方ないわね。クラスの設備のためだし、協力してあげるわ。ね、瑞希？」
「あ。は、はいっ！これくらいお安い御用です」
二人とも快諾してくれた
「それならすぐに着替えて会場に向かってくれ。大会では自分たちの所属がFクラスであることを強調するんだぞ」
「オッケー。任せておいて。行くわよ瑞希」
「はいっ」
チャイナドレスを抱えて教室を出て行く二人。あっちは大丈夫だろう
「・・・・・・できた」
「わ、このお兄さんすごいです」

どうやら葉月の服も完成したようだ。てか早すぎないか？
下心が絡んだムッツリーニに不可能はないことは知っていたが、小学生まで守備範囲だったとは。流石に引くな
「ふむ。それでは着替えるとするかの」
「ちょ、ちょっと秀吉！ここで着替えるの！？キチンと女子更衣室で着替えないとだめだよ！」
おーい、その子男ですよ
「・・・最近、明久がわしのことを女として見ておるような気がするんじゃが」
「気のせいだ。秀吉は秀吉だろう」
流石雄二。いいこと言った
「うん。雄二の言うとおりだよ。秀吉は性別が『秀吉』でいいと思う。男とか女とかじゃないさ」
「お前もうしゃべるな！」
「え？」
「・・・俺が言ったのはそういうことじゃない」
もう末期だな
「んしょ、んしょ・・・」
「・・・・・・！！（ボタボタボタ）」
「は、葉月ちゃん！君もこんなところで着替えちゃだめだよ！ムッツリーニが出血多量で死んじゃうから」
大量に出血しているはずなのに、鼻を抑えているムッツリーニは心から幸せそうだった。
（・・・俺なんでこいつらと友達やってるんだろ）
本気でそう考える今日この頃

九限目　真相（後書き）

境『はい、今回は恭介さんに来てもらってます』

恭「ども」

境『テンション低いな君は』

恭「いきなりひっぱってこられてテンション上げろって方が無理だ」

境『まあそれはどうでもいいとして』

恭「おい！」

境『なんだよめんどくさいな』

恭「お前が呼んだんだろ！」

境『あーはいはい。そうでしたね。それで何？』

恭「ぐっ、このやろ・・・。まあいい、で、何で今回は急に呼んだんだよ。今までなかったのに」

境『あーそれ簡単。暇だったから』

恭「適当だなオイ！」

境『後書きなんてそんなもんでしょ』

恭「謝れ！今すぐ謝れ！」

境『ごめんなさいでしたー』

恭「誠意なさすぎだろ・・・。はあ、もういいや」

境『はいお疲れ様。という訳で今度からたまにあとがきでこういうことやっていこうかと思います』

恭「俺としてはもうやりたくない・・・」

境『それでは相方が限界みたいなので今回はこれくらいで』

恭「いつのまにコンビ結成したんだよっ！」

十限目　誘拐

問題　以下の文章の（　）に入るものの名称を答えなさい
濃塩酸に濃硝酸を加えると（　）ができる

風島恭介の答え
王水

教師のコメント
正解です。ちなみに濃塩酸とは１２？／Ｌ、濃硝酸とは１５？／Ｌの酸ということも覚えておくと良いです

吉井明久の答え
濃塩硝酸

教師のコメント
くっつければいいという訳ではありません

姫路瑞希の答え
みりん

教師のコメント
味以前に舌が融けます

・・・まさか本当にやってはいませんよね？

「たっだいまー」
「ただ今戻りました～」
「ああ、戻ったか。疲れてるとこ悪いがホールに回ってくれ」
二人が大会に向かった後、俺たちはチャイナドレスに着替えた秀吉と葉月をつれて校内を歩きまわった。そのおかげで今は大分客が増えてきていた
「良かった。段々持ち直してきたのね」
「良かったです」
「女性客も増えてきてる。味についてのうわさも流れ始めたみたいだ」
自分で言うのもなんだが飲茶の出来は相当のものだ。少しづつだがチャイナドレス目的以外の客も増えてきている
「ところで」
「ん？なんだ？」
「何であんたはさっきから目をそらしてるのよ」
「・・・何のことでしょうか？」
「さっきからずっとあたしから目をそらしてるでしょ！」
「気のせいデスヨ」
「しゃべり方変になってきてるし・・・。というか何なのよさっきから」
「い、いや、それは・・・」
い、言えない。美波のチャイナドレス服姿が可愛すぎて直視できないなんて言え・・・
「きっと美波ちゃんが可愛いから照れてるんですよ」
言っちゃったよー！この人！
「ふぇ／／／！？」
「ひ、姫路お前何言って・・・」

「ほ、本当？」
美波が顔を真っ赤にして上目ずかいで聞いてくる。か、可愛い・・・
「い、いや、その、ま、まあ・・・」
「／／／／／／」
「恭介、島田。いちゃついてないでさっさとこっちを手伝え」
「「いちゃついてなんかねえよ（ないわよ）！」」
「二人とも落ち着いて、とにかく今は忙しいんですし仕事しましょう！」
元凶がなにをいってるんだと思ったが実際今は忙しかったので俺は厨房に戻った
「・・・・・・（トントン）」
「ん？どうしたムッツリーニ」
気がつくとムッツリーニが後ろにいた。ホントに神出鬼没だな
「・・・・・・明久に茶葉のほかに餡子もすぐに持ってくるように伝えてほしい」
確かに餡子ももうほとんどなくなっている
「分かった伝えてくる」
「・・・・・・任せた」
俺は教室を出て旧校舎の廊下速足で歩いてストックの置いてある教室に向かった
「おい明久。ムッツリーニが茶葉のほかに餡子もすぐに持って来てくれだってよ」
「あ、恭介。ちょうど良かった」
「ん？なんだこいつらは？」
見ると教室の中には明久のほかに明らかにこの学校の人間ではない奴が三人いた
「よくわからないけど、恭介と喧嘩がしたいみたいなんだ。だから、あとはよろしくね」
「はあ？なんじゃそりゃ。どういうことだよ？」
突然のことで戸惑う俺を教室に引き入れ代わりに明久が廊下に出た

「おい明久。これは・・・ああ、そうか。そういうことか」
例の妨害の続きってことか
「こいつどうする？」
「面倒だから一緒にやっちまおうぜ」
これから自分たちがどうなるのかも知らずにそんなことを言っている馬鹿ども。俺はそれに笑いをこぼさずにいられなかった
「てめえ、何笑ってやがる！」
「なに、これから痛い目にあうことも知らない哀れな連中を見たら笑いが抑えられなくてな」
「な、なんだ、こいつ」
「さっさと・・・くたばりやがれ！」

・・・少々お持ちください・・・

「あ、終わった？」
「明久か。まあ楽勝だったぜ」
俺の前にはボロボロになった不良たちが転がっている。当然俺は無傷だ
「く、くそ。こんな奴に」
「なんだ？まだやられ足りないのか？」
「ひぃ、も、もう勘弁してくれぇ」
「ふん、まあいい。だがな、次に何か妙な事をしたらこの程度じゃすまさねぇから覚えておけ」
「わ、分かった。もうなにもしたりしねぇから」
「だったらさっさと消えろ。ウジ虫ども」
そういうと不良たちはふらふらと走って逃げて行った
「それにしても恭介も容赦ないね」
「何言ってるんだ。一応手加減はしたさ」
「あ、あれで手加減してるんだ」
明久が若干引いた。別に大したことじゃないだろうに

「恭介なら鉄人にも勝てるんじゃない？」
「馬鹿言うな。あんな人外の生物に人間が勝てるわけないだろ」
鉄人に勝てる奴なんて世界中探しても見つからないんじゃないだろうか？
「くだらないこと言ってないでさっさと戻るぞ。ムッツリーニが待ってる」
「はいよ」
俺と明久は餡子と茶葉を抱えて喫茶店に戻った

★

「それにしても一気に忙しくなたのう」
「まあそうだな」
店の中には午前とは比べ物にならないほど人が沢山いる。おまけに今明久たちは試召戦争に行っていて、しかもその相手は美波たち。一気に四人抜けているため店はかなり忙しくなっている
「そろそろ四回戦も終わったころかのう」
「そうだと助かる。今は人手不足だからな」
雄二と明久はともかくウェイトレスの美波と姫路は早く戻ってきてくれないと店が回らなくなる
『お、あの子たちだ』
『近くで見ると一層可愛いな！』
『手伝いの小さな子も教室内にいる子も可愛いし、レベルが高いな！』
客の中からそんな声が上がる。どうやら戻ってきたようだ
「やっと戻ってきたか。それでどっちが勝ったんだ？」
「雄二、かな」
「そうね。坂本の一人勝ちね」
「ですね」
「は？同じチームなのに明久は負けたのか？」

訳がわからん
「そんなことよりも、数少ないウェイトレスが固まっていたら客が落胆するぞ。今は喫茶店に専念してくれ」
「そうですね。喫茶店のお手伝いもしないといけませんよね」
「そうね。ちょっと視線が気になるけど、売り上げのためにも頑張りますか！」
「はいっ。葉月もがんばります」
「・・・わしは一応男なのじゃが・・・」
「秀吉。絶対に性別をバラしちゃ駄目だからね？」
明久が秀吉に念を押す。まあ例えばばらしたとしても客もジョークか何かだと思う気がするが
「やれやれ、仕方ないのぅ・・・。あ、いらっしゃいませー！中華喫茶ヨーロピアンへようこそ！」
新規入店の客が着た瞬間に秀吉の口調が変わる。流石演劇部のホープだ
「さて、俺たちも突っ立ってないで手伝うか」
「ん、そうだね」
「そうするか」
明久と雄二も喫茶店を手伝うために用意されたエプロンを身につけ、俺も自分の仕事に戻った

★

「それじゃ、準決勝に行ってくるね」
「ああ、もうそんな時間か」
「うん」
「負けるなよ？」
「当り前さ！」
（そうか、もう準決勝か。決勝は明日だしそろそろ一度ババァにこれまでのことを報告に言ったほうがいいかもしれないな）

「明久。この試合は特に負けられないからな」
「そういえば次の相手は霧島と木下姉だったな。大丈夫なのか？」
「大丈夫だよ。雄二に作戦があるみたいだし」
どっちかというと俺はそっちのほうが心配だ
（おい、明久）
雄二に気付かれないよう小声で話しかける
（何？）
（お前も何か考えておけよ？）
（？どうして？）
（相手はあの霧島だ。雄二の考えてることは見透かされてると考えていいだろう）
（ええ！じゃあどうするの？自慢じゃないけど僕には作戦なんて何もないからね）
本当に何の自慢にもならないな
（別になんでもいい。霧島のほうは雄二を生贄にすればなんとかなるだろ）
（あ、それもそうか）
「よし。じゃあ行くぞ明久」
自分が生贄にされることも知らずに自信満々といった感じで言う雄二
「うん、そうだね」
「それじゃ、俺もちょっと出るか」
「あれ、恭介もどこか行くの？」
「ああ、ちょっと用事がな。心配しなくてもすぐ戻る」
「そっか。それじゃ行くね」
「ああ、勝ってこい」
会場に向かう明久と雄二。俺も二人が出てすぐに教室を出て校長室に向かった

★

「・・・これが今までの状況だ」
「ふむ」
俺の報告を聞いたババァは深刻な顔をしてなにやら考え込んでいる
「そうかい。向こうはそこまで手段を選ばなくなってきたか・・・」
明久を直接狙ってきたところから見ても相当焦ってるのは間違いないだろう
「そろそろ明久たちにも事情を説明したほうがいいんじゃないか？」
最初の頃の店への営業妨害だけならまだしも、今回は明久を直接狙ってきてる。黙っておくというのはまずいだろう
「ふむ・・・」
どうするか決めかねているようだ。ことがことだけにしょうがないが
「・・・仕方がないか」
どうやら決めたらしい
「なら今日の仕事が終わったら俺が明久たちを引き留めておく」
「悪いけどそうしてもらえるかい？」
「ああ。それじゃあ俺はそろそろ教室に戻る」
事情を話さずに出てきたから早く戻らないと美波にどやされそうだしな
「気おつけなよ」
「分かってるよ」
そう答えて俺は教室に戻った。
教室の前まで来ると明久たちがドアの前で何か話していた
「何かあったのか？」
「あ、恭介！大変だよ！姫路さんたちがさらわれたんだ！」
「何！美波もか！？」
「うん」
しまったと思った。明久たちへの直接的な妨害が失敗した時点でこうなることは十分予想できた。それなのに美波たちから離れてしまった自分に腹が立つ
（それにしてもおかしい）

いくらなんでもタイミングが良すぎる。俺はそんなに長く教室を空けていたわけじゃない。教室を出るときにも妙な連中は見なかった。そういえばなんで連中は明久たちが校長とつながってることを知っていたんだ？
（・・・盗聴かっ！）
校長室が盗聴されていたんだとしたら辻褄が合う。クソっ！何で気付けなかったんだ！
「・・・・・・行き先なら分かる」
「本当か！？」
コクリとうなづくとムッツリーニはラジオのような機械を取り出した。・・・っていうかこれって
「ムッツリーニ、一応聞くがこれはなんだ？」
「・・・・・・盗聴の受信機」
「そうか・・・残念だよムッツリーニ。クラスメイトから犯罪者を出すことになるなんて」
「・・・・・・！！（ブンブン）」
本当に残念だ。友達が犯罪者になってしまうなんて
「馬鹿なことやってる場合じゃないだろ」
それもそうだ
「さて、場所が分かるなら簡単だ。かる～くお姫様たちを助けだすとしましょうか。王子様？」
「そこで俺を見るな」
「それにしても今回は雄二に感謝しておくよ。姫路さんたちに何かあったら、正直召喚大会どころの騒ぎじゃないからね」
「・・・それが向こうの目的だろうがな」
「え？」
雄二がまたこちらを見る。今度は真剣な表情で。やはり雄二にはばればれだったな
「その話は後だ。まずはあいつらを助け出すのが先だ」
「そうだな・・・。ムッツリーニ、タイミングを見て裏から姫路た

ちを助けてやってくれ」
「・・・・・・わかった」
「それで、俺たちはどうする？」
「王子様の役目は昔から決まってるだろう？」
「まあ、それもそうか」
「王子様の役目って？」
「お姫様をさらった悪者を退治することさ」

十限目　誘拐（後書き）

恭「今回はまた随分と遅かったな」

境『委員会の仕事が忙しくてね』

恭「そいつはお疲れさん」

境『ホントだよ・・・。しかもあと何週間かは忙しいし』

恭「まあでも委員会の仕事ならしょうがないだろ」

境『うん、まあそこは諦めてる。まあそういう訳で何週間かの間少し更新が遅れそうです。出来るだけ早く出せるようにしますんでよろしくお願いします』

次回は清涼祭編ラストです

十一限目　怒りと本当の気持ち

問題　以下の問いに答えなさい
冠位十二階が制定されたのは（　）年である

姫路瑞希、風島恭介の答え
６０３

教師のコメント
正解です

坂本雄二の答え
６０３

教師のコメント
一体どうしたのですか？驚いたことに正解です

吉井明久の答え
６０３

教師のコメント
君の名前を見ただけでバツをつけた先生を許してください

『さてどうする？坂本と吉井、それに風島だったか？そいつら、この人質を盾にして呼び出すか？』

『待て。吉井と風島ってやつは知らないが、坂本は下手に手を出すとまずい。今はあまり聞かないが、中学時代は相当鳴らしていたらしいからな』
『坂本って、まさかあの坂本か？』
『ああ。出来れば事を構えたくないんだが・・・』
『気持ちはわかるがそうもいかないだろ？依頼はその三人を動けなくすることなんだから』
ムッツリーニの持っていた受信機からそんな会話が聞こえてくる
（雄二、この連中って）
（ああ。黒幕に依頼されたそこらのチンピラだろうな）
『お、お姉ちゃん・・・』
『アンタたち！いい加減葉月を話しなさいよ！』
聞こえてくる美波の怒鳴り声。葉月がつかまってるせいで抵抗することもできず連れてこられたのだろう『お姉ちゃん、だってさ！かっわいぃー』
『ギャはははは！』
こいつら・・・！上等だ！今すぐ黙らせてやる！
（待て、恭介。気持ちはわかるが今はまだこらえろ）
（くっ、わかってるっ！）
そうだ、雄二の言うとおりだ。もうすぐムッツリーニが何とかしてくれる。あいつらはそれから叩きのめせばいい。今は我慢だ
『・・・・・・灰皿をお取り替えいたします』
『おう。で、このオネーチャンたちどうする？やっちゃっていいの？』
『だったら俺はこっちの巨乳チャンがいいなー！』
『あっ！ズリー！それなら俺二番ね！』
我慢だ
『あ、あのっ！葉月ちゃんを放して、私たちを帰らせてください！』
『だってさ～。どうする？』
『それはオネーチャンたちの頑張り次第だよな？』

我慢しろ
『やっ！さ、触らないで・・・・」
『ちょっと、やめなさいよ！』
我慢・・・
『あーもう。うっせぇ女だな！』
『きゃぁっ！』
・・・できるかっ！
（お、おい。恭介待て！）
雄二の制止を振り切り俺はドアを開け放ち目的の部屋に入った
「か、風島君？」
「恭介・・・」
身を縮めている姫路と、尻もちをついている美波
「ハァ？お前誰よ？」
入口付近に座っていた男が俺に声をかけてくる
「てめえら・・・」
「あん？なん・・・グハッ！」
「・・・ぶち殺すっ！」
「てっ、てめぇ！ヤスオに何しやがる！」
近くにいた男が殴りかかってくる。俺はそいつの腕をつかみそのまま顔面に肘を入れてやった
「ごばぁっ！」
相手は鼻血を散らしながら床に沈んでいった
「てめえら、よくも美波に手をあげやがったな・・・。全員、生きて帰れると思うなよ！」
「コイツ、風島って野郎だ！」
「どうしてここが！？」
「とにかく来ているのならちょうどいい！ぶち殺せ！」
テーブルを蹴散らし、四人の男が群がってくる。俺はまず一番近くにいた奴にはいキックを食らわせ床に沈める
「くそっ！たった一人で調子くれてんじゃねぇよ！」

「・・・一人じゃない」
「なにをいっ・・・ごはっ！」
「まったく、貸し一つだぞ？」
「坂本まで来たのか！」
「雄二だけじゃない！」
「げふっ！」
明久も参戦。これで向こうは残り一人だ。終わり・・・「きゃあ！」
美波！？悲鳴のしたほうを見ると残った一人が美波にナイフをつきつけていた
・・・この時、俺の中で何かがキレた
「てめぇら、動くんじゃねぇぞ。ちょっとでも動いたらこの女を「・・・すぞ」あん？」
「きょう、すけ？」
「殺すぞっ！この屑がぁぁぁぁーーーーーーーー！！！」
ドガシャァァァーン
俺は入口のドアを思い切り蹴った。ドアはくの字に曲がり吹っ飛ぶ
「なっ・・・！」
それを見たチンピラは絶句する。明久たちも驚愕の目で俺を見ている
「美波にキズ一つでもつけてみろっ！今のをてめぇの脳天にぶち込むぞ！」
脅しではない。もしこいつが美波にキズ一つでもつけたら俺は確実にこいつを殺す。向こうも脅しじゃないと分かっているのだろう。
手が小刻みに震えている
「美波を、放せ・・・！」
一歩ずつ近づいていく
「う、あ・・・」
チンピラの目は恐怖で染まっていた。俺が一歩近づくたびに向こうも一歩下がっていく
「放せっ！」
「う、うあぁぁぁぁぁーーーーーー！！」

恐怖で我を失ったチンピラがナイフを振りかざして突っ込んできた。
それを沈めようとした時
ゴインッ
「あがぁっ！」
白目をむいて倒れるチンピラ。その後ろには
「ムッツリーニ・・・」
クリスタルの灰皿を振り切ったポーズで立っているムッツリーニがいた。そういえば先に潜入してたんだったな。チンピラを全員倒したところで場の空気が重くなった。皆さっきの俺を見て何も言えないのだろう。俺はそんな空気の中まっすぐ美波のところへ歩いていく
「きょ、きょう・・・すけ？」
美波の顔には若干の怯えが見える。無理もないだろう。しかし今の俺にはそれもどうでもよかった。ただ美波に近づいていき、そして・・・
ギュッ
美波を思い切り抱きしめた
「ふ、ふえぇぇー！きょ、恭介！？」
いきなりのことで驚き暴れる美波。でも俺は放そうとはしない
「美波。無事で、良かった」
「あっ」
美波が暴れるのをやめる。かわりに美波も手を俺の後ろに回してきた
「本当に、良かった。お前が無事で」
「うん。ごめんね・・・心配かけちゃって」
「いい。お前が無事なら」
そのまま俺たちは少しの間抱き合っていた
・・・ところでここで一つ忘れていたことがある。この場所には・・・
・
「「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」」」

・・・こいつらがいたのだということを
「「っつ！」」
俺と美波ははじかれるように離れた
「お、お前らいたのか」
「うん、最初からいたよ」
さっきとは違う意味で空気が重くなる。美波のほうを見ると耳まで真っ赤になっている。俺の顔もそれに負けないぐらい赤くなっているのがわかる
「あ、あーお前ら、邪魔しちゃ悪いし行くぞ」
「そ、そうですね」
「ご、ごゆっくりー」
そう言って部屋を出て行く雄二たち。雄二たちがいなくなって少しして俺と美波は顔を見合わせ
「「行かないでぇ！」」
同時に叫んだ

★

「疲れた・・・」
「ホントね・・・」
俺は現在美波を家に送っている。とはいっても俺の家は美波の家の隣なのだが・・・
校長室に仕掛けられていた盗聴器はムッツリーニに頼んだら5秒で見つかった。ムッツリーニには驚くしかない。明久と雄二は現在ババァから今回の件に関する詳しいことを聞いている。まあ明久はともかく雄二はほとんど分かっているだろうが
「美波」
「何？」
「いや、悪かったな。大変な目にあわせちまって」

ムッツリーニがいなかったら下手をすれば警察沙汰になっていただろう
「別に気にしてないわよ」
「いや、でも・・・・」
「それにね」
「ん？」
「その、恭介が助けに来てくれた時、私のためにおこってくれたの、凄く、嬉しかった」
ドキッ
その時の美波の笑顔は本当に綺麗で俺は見とれてしまった

（ああ、そうか・・・・。ようやく分かった）

何で最近美波の顔を見るだけでドキドキしたのか。あのモヤモヤの正体

（俺は・・・好きになってたんだ。美波のことが）

ただの幼馴染じゃない、一人の異性として

「なあ、美波」
「ん？何？」
「あのさ、今度二人で出掛けないか？」
「え？どうしたのいきなり」
「久しぶりにお前と二人でどっか行きたいと思ってさ」
そういうと美波は嬉しそうに
「うん！絶対だからね！」
笑って言ってくれた

★

その日の夜。俺は明久の家の前にいる
「今頃必死に勉強してるんだろうな」
明日の対戦相手はあの常夏コンビだ。絶対に負けられない戦いになるだろう
ピンポーン
「はーい、って恭介。どうしたの？」
「いや、ちょっとな」
「そっか。とりあえず入ってよ」
「ああ。邪魔するぞ」
そう言って明久の家に入る
「それで、どうしたの？」
「話、聞いただろ？」
「うん」
「悪かったな。黙ってて」
「ううん。しょうがないよ。口止めされてたんだし」
「だが俺がもっと早く話していればあんなことにならなかったのは事実だ」
「でも、恭介はちゃんと助けに行ったじゃないか。誰も恭介のこと怒ったりしないよ」
「そっか」
俺は本当にいい友達を持ったと思う
「そんじゃあ本題に入るか」
「え？何のこと？」
「明日の教科の勉強してたんだろ？」
「うん。まあそうだけど」
「俺が手伝ってやる」
「え？恭介が！？」
「明日の教科はなんだ？」
「え、えっと、日本史だけど」

「で、お前の日本史の点数は？」
「百点も行かないよ・・・」
それだとAクラス相手じゃ負けは必死だな
「分かった。なら俺が三百取らせてやる」
「え！？そ、そんなこと出来るの！？」
サラサラ
「ほら、これが明日の試験問題だ」
「へ？」
「教師の出題傾向からある程度の予想は出来る。これを覚えるだけで二百は堅いだろう。さて、残りの百点を上乗せするためのポイントだが・・・」
「ちょ、ちょっと待って。今写すから」
こうして夜は更けて行く

★

「ふわぁ～。ねむ・・・」
学園祭二日目の朝。昨日の夜はほとんど明久につきっきりだったため結局徹夜した
「？どうしたの？ねむそうだけど」
美波が聞いてくる
「ん？ああ、ちょっと昨日寝てなくてな」
「どうしてよ？」
「昨日徹夜で明久の勉強見てたんだよ」
「へ？あんたが？」
信じられないといった顔で見てくる。そこまで驚きますか？・・・
いや、まあわかるけどさ
「でもそんなんで今日大丈夫なの？あんた厨房の責任者でしょ？」
「んーまあ大丈夫だと思う」
「・・・・・少し休んだほうがいい」

「うおっ！何だムッツリーニか」
いつの間にか後ろに来ていたムッツリーニ。ホントにこいつは気配が読めない
「いや、でも抜けても大丈夫なのか？」
「・・・・・・（こくり）」
「ムッツリーニの言う通りじゃ。おぬしも少し休んだほうがよい」
秀吉もそう言ってくれる
「分かったよ。悪いな」
俺は二人の好意に甘えて仮眠をとることにした

★

「さてと。行こうか雄二」
「そうだな。恭介、あとは任せたぞ」
「ああ、勝てよ」
「負けたら承知しないわよ」
「あとで私たちも応援に行きますね」
「ここまで来たんじゃ。抜かるでないぞ？」
「・・・・・・優勝」
「分かってる。試召戦争のときみたいなヘマはしないよ。それじゃ、行ってくる」
「やれやれ。耳が痛いな」
俺と秀吉とムッツリーニがつきだした手に軽く拳をあてて、明久と雄二は会場に向かって歩きだした
（負けるなよ）

明久ｓｉｄｅ

『さて皆さま。長らくお待たせ致しました！これより試験召喚シス

テムによる召喚大会の決勝戦を行います！』
聞こえてくるアナウンスは今まで聞いたことのない声だった。もしかするとプロを雇っているのかもしれない。世間の注目を集めている大会だし、充分に考えられることだ
『出場選手の入場です！』
「さ、入場してください」
先生にポンと背中を叩かれる
僕と雄二は軽くうなずき合って、観衆の前に歩み出て行った
『二年Ｆクラス所属・坂本雄二君と、同じくＦクラス所属・吉井明久君です！皆様拍手でお迎えください！』
盛大な拍手が雨のように降ってくる。随分とお客さんが入ってるみたいだ。きっとこの中には姫路さんのお父さんもいるのだろう
『なんと、最高成績のＡクラスを抑えて決勝戦に進んだのは、二年生の最下級であるＦクラスの生徒コンビです！これはＦクラスが最下級であるという認識を改める必要があるかもしれません！』
（あの司会、嬉しいことを言ってくれるな）
（だね。姫路さんのお父さんに好印象になるね）
『そして対する選手は、三年Ａクラス所属・夏川俊平君と、同じくＡクラス所属・常村勇作君です！皆様、こちらも拍手でお迎えください！』
コールを受けて僕らの前に姿を現したのは、昨日散々迷惑をかけてくれた例の常夏コンビだ
『出場選手が少ない三年生ですが、それでもきっちり決勝戦に食い込んできました。さてさて、最年長の意地を見せることができるのでしょうか！』
同じようにに拍手を受けながら、二人はゆっくりと僕らの前にやってきた
「よう先輩方。もうせこい小細工はネタ切れか？」
「お前らが公衆の面前で恥をかかないようにという優しい配慮だったんだがな。Ｆクラス程度のおつむじゃ理解できなかったか？」

「残念ながら、お前らの言葉なんてAクラス所属でも理解できないだろうよ。まずは日本語を覚えてくるんだな。サル山の坊主大将」
「て、テメェ、先輩に向かって・・・！」
観客には聞こえない程度の小声で挑発戦が行われていた。雄二も言ってやりたいことが沢山あるのだろう。僕も確認したいことが一つだけあった
「先輩。一つ聞きたいことがあります」
「ぁんだ？」
「教頭先生に協力している理由はなんですか」
そう聞くと、坊主先輩は一瞬驚いた顔をした
「・・・そうかい。事情は理解してるってことかい」
「大体は。それでどうなんですか？」
「進学だよ。うまくやれば推薦状を書いてくれるらしいからな。そうすりゃ受験勉強とはおさらばだ」
「そうですか。そっちの、常村先輩も同じですか？」
「まぁな」
「・・・そうですか」
小さくうなずいて会話を打ち切る。僕が聞きたいのはこれだけだ
「本当は小細工なんていらなかったんだよな。Aクラスの俺たちとFクラスのお前らじゃ、そもそもの実力が違いすぎる」
「そうか。それなのにわざわざ御苦労なことだな。そんなに俺と明久が怖かったのか？」
「ハッ！言ってろ！お前らの勝ち方なんて、相手の性格や弱みに付け込んだ騙し打ちだろうが。俺たち相手じゃ何もできないだろ！」
それは確かにそうかもしれない。僕らが今まで勝ってこれたのは、相手のことを知っていたからだ。今回の対戦相手だと今までと同じようなパターンは不可能だ
『それでは試合に入りましょう！選手の皆さん、どうぞ！』
「「「「試獣召喚」」」」

日本史　Ａクラス　常村勇作＆夏川俊平　２０９点＆１９７点

「どうした？俺たちの点数見て腰が引けたか？」
「Ｆクラスじゃお目にかかれないような点数だからな。無理もないな」
「ホラ、観客の皆様に見せてみろよ。お前らの貧相な点数をよ」
「夏川。あまりいじめるなよ。どうせすぐに晒されるんだぜ？」
ククッとモヒカン先輩が趣味の悪い笑い方をした
「・・・前に」
「ぁん？」
「前に、クラスの子が言ってた」
「なんだ？晒しものにされた時の逃げ方でも教えてくれたのか？」
「『好きな人のためなら頑張れる』って」
「ハァ？コイツ何言ってんだか？」
「僕も最近、心からそう思った」

Ｆクラス　日本史　坂本雄二＆吉井明久　２１５点＆３０７点

「「なっ！？」」
点数が表示されたディスプレイを見て、二人の顔色が変わった
「あんたらは小細工なしの実力勝負でブッ倒してやる！」
試験召喚獣が獲物を構える。戦闘開始だ

★

「まさか明久がこんな点数を取るとは、恭介さまさまだな」
「うん」
まさか本当に宣言通り三百点も取れるなんて思わなかった。やっぱり恭介は天才だ
「夏川！こっちは俺が引き受ける！」

モヒカン先輩が慌てて雄二の正面に立った。動き出すのが遅れたせいで、雄二の召喚獣にかなりの接近を許している
「それじゃ、僕の相手は先輩ですね」
「上等じゃねぇか！多少山が当たったくらいで調子に乗るなよ！」
正面から坊主先輩の召喚獣が剣を構えて突っ込んでくる。動きが速い、けど
「先輩、取り乱し過ぎですよ？ただの突撃じゃよけてくれと言っているようなものです」
半身を右にずらし、小さな動きで相手の体を避ける。バカ正直に正面から来た斬撃はかすりもしない
「っと、この・・・！」
そのまま背中を向けそうになった相手は、振り向きざまに横なぎの一撃を放ってきた
「ふっ！」
その一撃を小さく屈んでかわし、一呼吸の間に三度木刀を振るう
「くぅっ！」
なんとか剣で防御した坊主先輩は仕切り直すように大きく一歩下がった。でも
「忘れてませんか先輩。今の僕の点数を！」
「なっ！速っ・・・！」
一気に接近し敵の喉を貫いた
「夏川！」
相方がやられ動揺するモヒカン先輩。それが決定的な隙になった
「よそ見とは余裕だな」
「しまっ・・・！」
「これで、終わりだぁぁー！」
モヒカン先輩の召喚獣に雄二の召喚獣の拳が深々と突き刺さる

『坂本・吉井ペアの勝利です！』

「いいいよっしゃぁああー！」

恭介ｓｉｄｅ
「ちくしょう！あいつらただじゃおかねぇ！」
「ぜってぇに許さねぇ！」
「まだ懲りてねぇみたいだな」
「て、てめぇは風島！」
「な、何のつもりだ」
「調子に乗った馬鹿どもに灸を据えるだけだ」
「何？」
「ぶっ潰す・・・！」

「ぐっ・・・」
「かはっ・・・」
一分後。常夏コンビはボロボロになって倒れている
「悪いな。俺はあいつらほどやさしくねぇんだ」

★

「ご苦労だったね」
「ああ」
無事清涼祭が終わり、俺たちは学園長室に来ていた
「これでようやく終わりってことだな」
「うん。でもまだ常夏コンビが何かしてきたりしないかな？」
「それなら心配ない。あいつらは俺がボコしといた」
「い、いつの間に」

「相変わらず手際がいいな」
「ああ。でもまだ全部は終わってない」
「どういうこと？」
明久が不思議そうに聞いてくる
「まだ元凶の始末をしてないだろ」
そう言って俺は懐からあるものを取り出した
「それって、スイッチ？」
「ああ」
「何の？」
「すぐ分かる。おいババァ」
「なんだい？」
「このくらいは許せよ」
明久たちが訳が分からないといった顔で見る中俺はスイッチを押す

ドッカーン

「な、何の音？」
『大変だー！教頭室が爆発したぞー！』
「ね、ねぇ。まさかと思うけど、これって」
「ああ、教頭室に後夜祭で使う花火を一個仕掛けておいたんだ。今頃教頭室は瓦礫の山だ」
「何してるのさ恭介！？」
「ま、まさかここまでやるとは」
『吉井と坂本はどこだー！』
「ええ！何で僕たちがやったことになってるの！？」
「恭介！まさかてめぇ」
「さーて、何のことかな」
「「恭介ー！」」
明久と雄二がつかみかかってくる。そこへ
「ここかぁ！」

「げっ！鉄人！」
「ハッハッハ、逃げろ逃げろ」

こうして俺たちの学園祭は終わりを告げた。明久と雄二は学園長が手をまわしたおかげで鉄人の補修を受けるだけで済んだ。チッ、余計なことを

「「悪魔かっ！」」

十一限目　怒りと本当の気持ち（後書き）

境『やっと投稿できた』

恭「これでやっと清涼祭編が終わったわけだ」

境『うん。そういう訳で次回から番外編に入ります』

恭「駄作者だが頼む」

番外編　一限目　俺と美波と如月ハイランド（前編）（前書き）

遅くなりました。どうぞお楽しみください

番外編　一限目　俺と美波と如月ハイランド（前編）

ある休日の昼下がり。俺は如月ハイランドの前にいる

・・・いや、正確には『俺たちは』、だ

「やっと着いたわね」

「ああ、そうだな」

そう俺は今美波と『二人』で如月ハイランドに来ているのだ。いや、これは別にデートという訳じゃなく、その、なんだ・・・ほら、あれだよ・・・。

・・・いや、もう認めよう。俺は今日美波と二人でこの如月ハイランドにデートで来ている

「ちょっと、何ボーっとしてるのよ」

「うおっ！」

気がつくと目の前に美波の顔があった

「ほら、ボサッとしてないでいくわよ。時間がもったいないし」

「お、おい。引っ張るなよ」

「だーめ」

（せっかく恭介と二人で来たんだから）

「ん？何か言ったか？」

「な、何でもないわよ。ホラ、行くわよ」

「わ、分かったから引っ張るなよ」

腕を引っ張られたまま入場ゲートに向かう。プレオープンだからか特に待つこともなく係員の前に進むことができた

「いらっしゃいマセ！如月ハイランドへようこソ！」

日本人ではないのか若干訛りのある口調で俺たちの笑顔を振りまく

係員
「本日はプレオープンなのデスが、チケットはお持ちですカ？」
「あ、はい」
「拝見しマース」
係員はそのチケットを受け取って俺たちの顔を見ると、笑顔のまま一瞬固まった
「あの・・・そのチケット使えないんですか？」
美波が不安そうに係員に聞く
「イエイエ、そんなコトはないデスよ？デスが、ちょっとお待ちくだサーイ」
係員はポケットから携帯電話を取り出し、俺たちに背を向けどこかに電話をし始めた
「私だ。例の連中が来た。ウエディングシフトの準備を始めろ。確実に仕留める」
「よし美波。さっさと行こう」
俺は美波を連れてさっさとその場を離れようとしたが
「オーウ、お待ちくだサーイ」
あの似非外国人につかまってしまった
「ウエディングシフト？」
美波が首をかしげる。こいつは如月グループのたくらみを知らないのだから無理はない。というか知らなくていい
「言っておくがウエディングシフトはいらんぞ。入場さえさせてくれれば後は勝手にやる」
はっきり言って嫌な予感しかしないからな。それに俺は今美波と付き合っているという訳でもないのだから
「そんなこと言わずニ、お世話させてくだサーイ。トッテモ豪華なおもてナシさせていただきマース」
「いらん」
「そこをナントカお願いしマース」
「ダメだ」

「この通りデース」
「くどい」
「断ればあなたの実家に腐ったザリガニを送りマース」
「死人が出るわ！」
そんなもん送られたらあの母親は間違いなくロブスターか何かと勘違いして食卓に揚げ、あの父親はそれを何の疑いもなくそれを口に運ぶだろう。なんて恐ろしい脅しをしてくるんだ
「では、マズ最初に記念写真を撮りますヨ？」
「記念写真？」
「ハイ。サイコーにお似合いのお二人の愛のメモリーを残しマース」
「お、お似合いって／／／」
美波が頬を赤くする。そういう反応をしてくれるのはうれしいんだがこの似非外国人の思惑通りに事が進むのは気に入らない
「お待たせしました。カメラです」
そこに帽子を目深にかぶったスタッフがカメラを片手に現れた。・・・っていうか明久が現れた
（美波）
（何？）
（逃げるぞ）
（へ？）
ガッ　ダッ
似非外国人がカメラを受け取っている間に俺は美波を連れてダッシュでその場から離れた

★

「はあはあ」
疲れたので立ち止まる。後ろを振り返るが追ってはこない。どうやら撒けたようだ
「な、なんなのよ。いきなり」

どうもこうもない。まさか明久がいるとは思わなかった。それにあいつがいるということは恐らくこの件には雄二たちも絡んでいるはずだ。あいつらのことだ、きっと応援という名の妨害をしてくるに違いない。それに付き合わされていたらこっちの身が持たない
「ちょっと、聞いてるの？」
「いや、悪い。いきなり走りだしちまって、その辺で少し休もう」
見ると美波は息も絶え絶えという感じだった。ものすごいハイペースで走ってきたからな
「ふぅ」
ベンチに座って一息つく。つーかまだ何もやってないのに何でこんなに疲れるんだ？
「それで？これからどうするの？」
美波が聞いてくる。どうするといっても何があるのかよくわからないからな。どのアトラクションに乗るか悩んでいると、狐の着ぐるみが近づいてきた
『お兄さんたち、フィーが面白いアトラクションを紹介してあげるよ？』
着ぐるみから聞こえてきたのは若い女の声。・・・っていうかどう考えても姫路だった。明久がいる時点で警戒はしていたが、こいつもだんだんFクラスに毒されてきてるな
「さっき明久がバイトの女子大生に映画に誘われてたな」
『えぇっ、明久君が！？それはどこで見たんですか？』
こいつは隠す気があるんだろうか？
「バイトか？姫路」
『あ・・・っ！ち、違いますっ！私・・・じゃなくてフィーは姫路なんて人じゃないよ？見ての通り狐の女の子だよっ♪』
今更取り繕っても意味がない気がするんだが・・・。まあ取り繕っていようと取り繕っていまいとばればれなんだが・・・
「わかったわかった。それで、お勧めはなんなんだ？」
『あ。う、うんっ。フィーのお勧めはねっ、向こうに見えるお化け

屋敷だよっ』
「そうか。サンキューな」
『いえいえっ。楽しんできてねっ』
「よし美波。お化け屋敷『以外の』アトラクションに行くぞ」
危険地帯を確認したところで美波を連れて歩きだす。すると、姫路、もといフィーが慌てたように俺の腕を掴んできた
『ままま待ってくださいっ！どうしてお勧め以外のところに行くんですか！？』
「どうもこうも、危険と分かっている所にわざわざ行くわけがないだろ！」
『そ、そんなの困りますっ！お願いですからお化け屋敷に行ってください！』
「断固拒否する！」
そもそも美波はお化け屋敷が苦手なのだ。この間も学園祭で気絶したし
『お願いです～っ！お化け屋敷はきっと楽しいですから～っ！』
「は・な・せ」
あまりしつこいので振り払おうかと思った時、何かが近づいてきた
『そこまでだ恭介・・・じゃなくって、そこのガラの悪い男っ！』
「その馬鹿な姿・・・明久だなっ！」
颯爽と登場したのは、雄ギツネの着ぐるみだった
『失礼なッ！僕・・・じゃなくてノインのどこが頭が悪いって言うんだ！』
「頭部を前後逆につけるような奴がバカ以外の何だというんだ！」
可愛らしいはずの着ぐるみが頭部が逆についているせいで、とてもシュールな生物になっていた
「き、きっとノインちゃんはうっかりさんなのよ」
「美波。うっかり頭部を逆にするような生物は一日ともたず絶滅するぞ」
あ、今小さな子が明久を見て泣いてしまった。子供にはあのシュー

ルな生物は刺激が強すぎるようだ
「しまった！道理で前が見えないと思った！」
（気付けよっ！つーかよく前が見えないのにここまで来れたな！逆にびっくりだよ！）
『早く直さないと風島君にばれちゃいます！』
（とっくに気付いてるっつーの！）
突っ込みたい気持ちを必死に抑える。こいつらはつくづくお似合いだと思う
「ねえ恭介」
「なんだ」
「行ってみない？」
『『えっ！』』
美波の口から信じられない言葉が発せられた
「いやいやいや。お前この間学園祭のお化け屋敷で気絶したばっかだろ！」
「き、気絶なんてしてないわよ！」
「完璧にしてただろ！」
「うっ。だ、だって、吉井はともかく瑞希に悪いような気がするし・・・」
「いや、だからって・・・」
「ね、これだけでも言ってあげようよ」
「ハァ。わかったよ。これだけだぞ」
『『ホントに！』』
「これだけだ。そのあとは一切かかわるなよ？」
『分かってますって。それじゃこちらにどうぞ』
ホントに分かっているのだろうか？

『ところで明久君。さっき女子大生に声を掛けられていたって聞きましたけど？まさか、大事な作戦の最中に他の女の人と・・・』
あっ、そういえばそんなこと言ったな。まあ誤解を解くのも面倒だ

し、それに明久にはちょうどいい罰だ
『え？なんのこと？僕は別に何も・・・あれっ？どうしたの？なぜか姫路さんの後ろに阿修羅が見えるんだけど？』
心配するな明久。俺にも見えてるから
『お話、ゆっくり聞かせてくださいね？』
『ま、待って姫路さんっ！僕は何も・・・ぎゃぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーー！』
明久の断末魔を背に、お化け屋敷へと向かった

★

「雄二。何をやっている」
お化け屋敷に着くとそこには雄二がいた。クソっ！やっぱりこいつも来てやがったか！
「はて何のことでしょう？私は雄二なんて人は知りませんが」
「はぁ、もういい」
いくら追及したところで無駄なのはもう分かっているので諦めた。もうどうにでもなれ
「では、荷物をお預かりいたします」
「あ、こぼれるから横にしないでね」
「わかりました」
零れる？・・・ああ。そういうことか
「恭介、いこ」
「ああ」
お化け屋敷の扉の前に立つ。演出なのか、扉は自動ドアでありながら電気が入ってなく、手動で開けるようになっていた。手動なら普通のドアにしてほしい
『俺だ。お化け屋敷にターゲットが入った。作戦を実行しろ』
扉が閉まる寸前、雄二の不吉な言葉が聞こえてきた
（何だよ作戦って！やっぱ来るんじゃなかったー！）

いまさらながらに後悔した。まあでも雄二もいるのだからそこまでアホな作戦ではないだろう。その分警戒もしなくてはいけないが
薄暗い廊下を美波と二人で歩く。ちなみに美波は既にがっちり俺の腕に抱きついてきている。なぜかそれが肘の関節を極めていて俺の腕は悲鳴をあげている
「お、おい。う、腕を放せ」
「ひ、一人で歩けっていうの！」
「そ、そうじゃなくて関節が・・・」
「へ？・・・あっ！ご、ごめん」
ようやく関節が解放された。しかし無意識のうちに関節を極めるとは・・・恐ろしい奴だ・・・
「い、いや。掴まるのはいいんだが関節はやめてくれ。腕がもげる」
「う、うん。わかった。それにしても、やたらと雰囲気あるわね」
「まあ廃病院を改造したらしいからな」
「そ、そうなんだ。ホントに出たりしないわよね？」
「出ねえから安心しろ」
順路と書かれたポスターにしたがって進んでいく
一階は特に何もなく、二階に上がり、少し進んだ廊下で初めて何かの演出が顔を出した

『・・・じの方が・・・よりも・・・』

怨嗟の声の演出かなんかか？
「あれ？この声恭介」
「ん？そうか？」
恐らく秀吉の声なのだろう。まあ確かに自分の声が聞こえてくるなんて言うのは怖いかもしれないが、あいつらにしては意外と普通・・・

『姫路の方が美波よりも好みだな。胸も大きいし』

「なんつーことしてくれてんだー！」
胸の話は美波にはタブーなんだぞ！恐る恐る美波の方を向くと
「・・・・・・」
俯いて何かつぶやいていた。それに少し震えている
「お、おい美波」
バシーン
「そんなに瑞希がいいなら最初から瑞希を誘いなさいよ！」
「い、いやあれは秀吉が・・・」
「恭介のバカ！」
そういうと美波は走ってどこかに行ってしまった。俺はそれを追うことができずに呆然としていた

走り去って行った美波は、泣いていた

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1505x/

バカとテストと天才少年

2011年11月27日23時06分発行